

中途退学者の課題・支援検討委員会  
報告書

監修：中途退学者の課題・支援検討委員会  
平成 25 年3月



# 目 次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 中途退学者の課題・支援検討委員会について.....            | 1  |
| 中途退学者に関わる課題・支援検討委員会 構成メンバー.....      | 3  |
| 『テーマ別プラットフォーム事業』 概要.....             | 4  |
| 第1部 大学及び短大からの中途退学について調査報告.....       | 6  |
| 大学及び短大からの中途退学経験者 調査結果.....           | 7  |
| 大学及び短大からの中途退学経験者 個別ヒアリング結果.....      | 22 |
| 大学及び短大からの中途退学について 支援団体 調査結果.....     | 33 |
| 大学及び短大からの中途退学について 大学・短大 調査結果.....    | 37 |
| 行政(県)の対応状況.....                      | 45 |
| 第2部 大学及び短大からの中途退学における課題と支援について.....  | 48 |
| 学生の中退とは何か ーそのメカニズムと理由、対策実施上の課題ー..... | 49 |
| 職業キャリアから大学中退問題を考える.....              | 52 |
| 大学及び短大からの中途退学に関する考察と提言.....          | 58 |
| 第3部 資 料.....                         | 64 |
| 大学生や中途退学者の悩みを考えるシンポジウム 概要.....       | 65 |
| 大学生や中途退学者の悩みを考えるシンポジウム 配布資料.....     | 69 |
| 大学生や中途退学者への支援団体案内物 チャート・団体紹介シート..... | 84 |
| 中途退学者の課題・検討委員会 審議過程.....             | 89 |

## 中途退学者の課題・支援検討委員会について

---

### 【事業の背景と目的】

高等学校の中途退学者及び大学の中途退学者は、義務教育ではないために、その後のフォローは基本的にされておらず、就労していない中途退学者の実態は把握できていない。

一方で、大学の中途退学率は10%（OECD Education at a Glance2012）とも、12%（日本中退研究所「中退白書2010」）とも言われている。栃木県の平成23年度における大学等進学者数は9,679人。仮に10%だとしても4年間で960人が大学を辞めてしまうことになる。しかし、大学等高等教育機関にいたっては、中途退学者の情報が出されておらず、その実態を把握することは難しいのが現状である。

こうした中途退学者は、学校から離れると家庭以外に所属のない社会的孤立の状況に陥りやすい。社会的孤立は長期化すれば問題の解決が難しく、内閣府の『ひきこもり支援読本』によれば、ひきこもりの状況にある若者が、ひきこもり始めてから支援開始までの期間で、5年以上10年未満（21.8%）、10年以上（13.0%）が相当数いることから、容易に長期化していると考えられる。

中途退学者の支援として、現在は、就労支援の若者サポートステーションが設置されているが、若者またはその家族からのアプローチがあって初めて支援がスタートするため、少なからず退学時から支援スタートまでに時間差が生じる。時間差が長くなる程、支援に長期間を要し、支援内容も難しくなる傾向にある。

以上のことから、学校（学）と地域（官民）がダイレクトにつながり、中途退学イコール社会的孤立とならないために教育、労働、福祉などの分野を越えたプラットフォームの構築が必要である。

本事業は、中途退学の予防を教育機関に要望するものではなく、学校・地域・行政が協働し、中途退学者を社会的孤立させない、社会的空白を生まないための支援策を協議し、試験的支援策を実施する。

### 【内 容】

#### 平成 23 年度

教育、労働、若者支援等に関わる多様な主体が集い、高等学校・高等教育機関の中途退学の実態の把握と共通の課題意識を醸成するためのプラットフォームを構築する。

#### 平成 24 年度

プラットフォームを活用し、中途退学に関わる実態の把握、課題の整理、支援策の協議、トライアル支援事業の実施とその評価、社会的喚起する事業を通し、中途退学者の社会的孤立を防ぎ、社会参加していく社会サービス・プログラムを開発する。

## 【期待される効果】

### 真の「新たな公」の実現

官学民の主体の違いに加え、教育、労働、若者支援、医療等、分野を越えたプラットフォームが構築されることで、「中途退学者」に関わる問題の実態を可視化し、官学による支援ではなく、地域社会全体での「中途退学者」への支援に繋げることができ、真の「新たな公」による地域づくりが実現する。

### 中途退学者の社会的孤立（若年無業者化）の阻止とQOLの向上、社会の担い手育成

中途退学者に対して、退学から社会参加するまでの空白期間を短くすることができ、社会的孤立を防ぎ、歩みを止めずに一歩踏み出す環境ができる。中途退学した若者にとっては、再チャレンジできるセーフティネットやエンパワメント（自信・意欲を高めさせること）がある社会環境となり、若者のQOL（生きる質）を高めることができる。長期的に捉えると若者の力を活かしやすい社会づくりを進めることができる。

### 大学教育の質的転換がより効果的に

大学等が参加するプラットフォームを構築することにより、中途退学者を社会全体で支援するところが可能となり、学生や地域社会に対する社会的責任を果たし、学校の信用・信頼を高めることができる。

### 労働市場の拡大と公的財政の支出削減

プラットフォーム構築と支援によって、中途退学者を若年無業者化させず、社会に繋げることで、労働人口の増加が図られ、労働市場を拡大することができる。また、生活保護や若者支援に関わる公的財政の負担を縮減することができる。

## 【先駆性・新規性】

文部科学省においても高等教育機関の「中途退学者」については実態が把握されておらず、課題としては未着手のテーマである。全国の中退予防に関する先駆的取り組みでは、「日本中退予防研究所」が『中退白書 2010』を発刊し、独自の調査で実態を明らかにし、高等教育機関での中途退学予防プログラムを運営している。

しかしながら、本事業のように官学民がプラットフォームを構築し、教育・労働・若者支援の分野を越え、実態把握と支援策の検討・実施を行う事例は、確認できていない。本事業により、「中途退学者」の社会的孤立・若年無業者化を防ぎ、若者の新たな社会参加を促す仕組みと事業ができれば、栃木県内はもとより、全国なモデルとなると考えられる。

中途退学者に関わる課題・支援検討委員会 構成メンバー

| 【大学】          |                        | (順不同・敬称略) |
|---------------|------------------------|-----------|
| 帝京大学 宇都宮キャンパス | キャンパスライフ支援センター         | 古玉 佐知子    |
| 宇都宮共和大学       | シティライフ学部 学生課・キャリア相談室   | 滝田 栄一     |
| 作新学院大学        | 人間文化学部/作新学新大学大学院心理学研究科 | 松本 秀彦     |
| 宇都宮大学         | キャリア教育・就職支援センター        | 末廣 啓子     |
| 文星芸術大学        | キャリアセンター               | 五月女 行徳    |
| 足利工業大学        | 教育連携センター               | 下妻 久男     |
| 【民間支援団体】      |                        |           |
| 一般社団法人        | 栃木県若年者支援機構             | 中野 謙作     |
| NPO 法人        | トチギ環境未来基地              | 塚本 竜也     |
| 一般社団法人        | とちぎ青少年自立援助センター         | 榎本 竹伸     |
|               | とちぎ若者サポートステーション        | 塚本 明子     |
| NPO 法人        | KHJとちぎベリー会             | 齋藤 三枝子    |
| NPO 法人        | KHJとちぎベリー会             | 小林 京子     |
| NPO 法人        | キャリアコーチ                | 高木 義博     |
| NPO 法人        | とちぎユースサポーターズネットワーク     | 岩井 俊宗     |
|               | とちぎユースワークカレッジ          | 横松 陽子     |
| 【行政】          |                        |           |
| 栃木県県民生活部      | 青少年男女共同参画課             | 諏訪 勝也     |
| 栃木県保健福祉部      | 医事厚生課                  | 片柳 誠      |
| 栃木県産業労働観光部    | 労働政策課                  | 添田 修      |
| 栃木県教育委員会事務局   | 学校教育課                  | 藤田 弘光     |
| 栃木県県民生活部      | 県民文化課 県民協働推進室          | 中村 美津子    |
| 栃木県県民生活部      | 県民文化課 県民協働推進室          | 谷田 克彦     |

事務局 栃木県県民生活部県民文化課  
NPO 法人 とちぎユースポーターズネットワーク

## 『テーマ別プラットフォーム事業』 概要

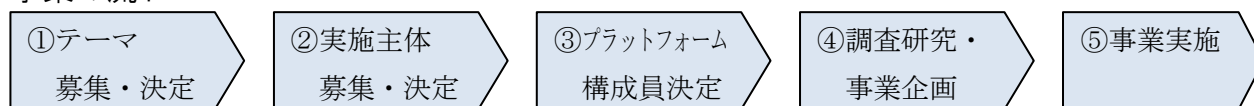
中途退学者に関わる課題・支援検討委員会では、「大学等中途退学者の社会的孤立防止」をテーマに、様々な観点から協議・検討を重ねてきた。この事業は、栃木県が実施している『テーマ別プラットフォーム事業』に採択され、平成23年度から実施している。

栃木県では、平成23年度から、地域課題解決等について、多様な主体と行政が連携・協働していくため、対等な関係で、ともに課題解決に向けて対応策を「検討・協議する場」を設け、多様な主体と行政による協働の取組を実践していく仕組み「とちぎ地域力創造プラットフォーム」を実施している。「とちぎ地域力創造プラットフォーム」のうち、県が運営し、県政課題解決に取り組むのが『テーマ別プラットフォーム事業』である。

※プラットフォームとは…

NPO、ボランティア、企業、地域団体、大学等の多様な主体が、共通する課題に応じて集まり、それぞれが得意とするネットワークや知恵を活かし、課題解決や新しい価値創造に向けて企画を作り、協働事業として実行に移していく場。

### ◆事業の流れ



- ①プラットフォームで検討、事業実施する県政課題のテーマを募集、決定。
- ②事業に主体的に取り組むNPO等を募集、決定。
- ③テーマに関係するNPO等・企業・大学・行政などから、プラットフォームに参加する団体を募り、構成員を決定。
- ④課題解決のため、調査・研究を行い、検討・協議しながら、具体的な事業を企画。
- ⑤プラットフォームで企画した事業を協働により実施。

### ◆「新しい公共支援事業」との関係

『テーマ別プラットフォーム事業』は、国から交付された「新しい公共支援事業交付金」に基づいて、栃木県が平成23、24年度に実施している新しい公共支援事業（新たな公の担い手支援事業）の「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」に位置付けられている。

#### ▶新しい公共支援事業

新しい公共の担い手となるNPO等の自立的活動を後押しし、新しい公共の拡大と定着を図る。

#### ▶新しい公共の場づくりのためのモデル事業

多様な担い手からなる新しい公共の体制を構築し、地域の諸課題の解決を図るプロセスをモデル的に実施する。





## 第1部

# 大学及び短大からの中途退学について 調査報告

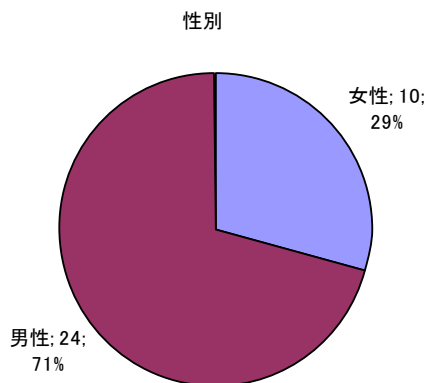
# 大学及び短大からの中途退学経験者 調査結果

## 調査概要

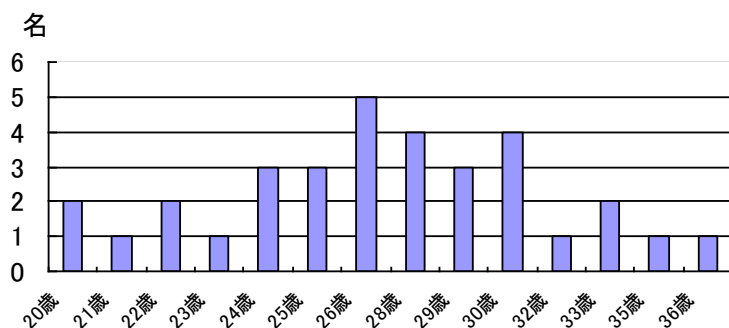
実施機関 中途退学者の課題・支援検討委員会  
 調査期間 2012年8月～10月  
 調査対象 栃木県在住の概ね35歳以下の大学等高等教育機関からの中途退学経験者  
 抽出方法 栃木県内の若者支援団体を通して呼びかけ調査同意を得た方  
           インターネットで呼びかけ調査同意を得た方  
 調査方法 記入式

## 【調査対象者の属性】

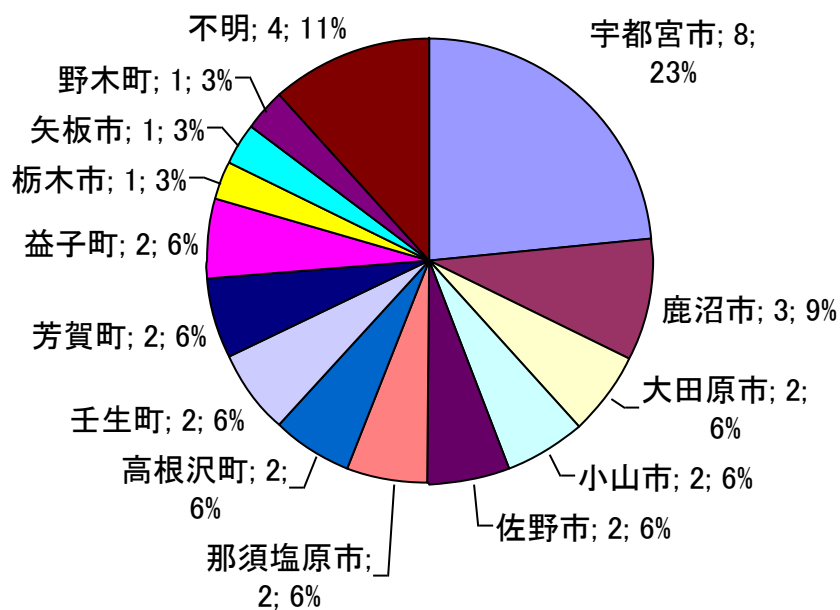
### ■1-1 性別



### ■1-2 年齢



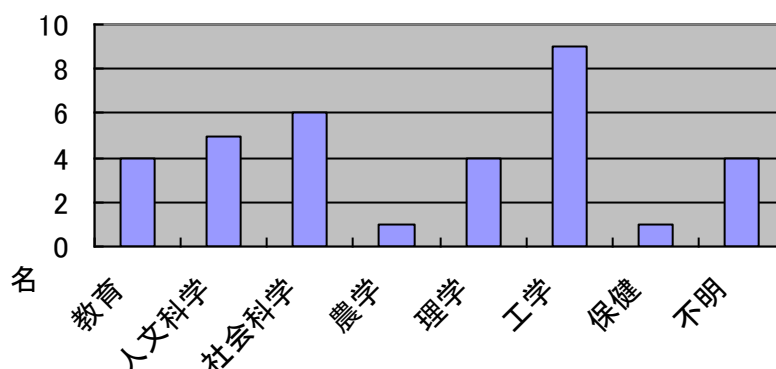
### ■1-3 現在の居住地



■1-4 大学・短大で在籍していた学部

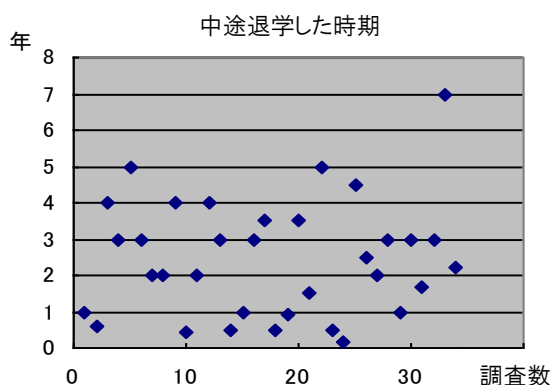
在籍していた学部は工学部系が多い傾向が見られる。

大学・短大で在籍していた学部



■1-5 中途退学した時期

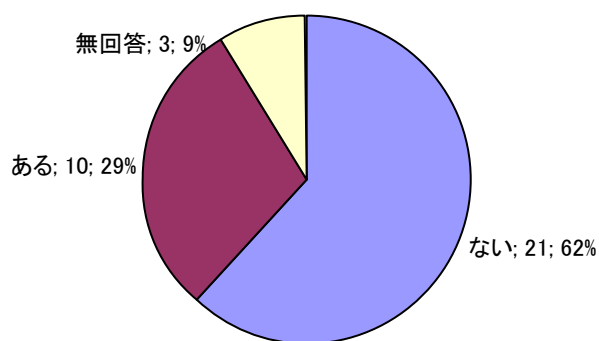
中途退学の時期については、在籍年数が低いほうが多い傾向はあるものの特に目立つ偏りは見られない。



■1-6 不登校の経験の有無

退学の背景に、人間関係に不安があるのではと予測し、不登校の経験について聞いた。その結果、不登校の経験があるものは 10 名(29%)であった。平成 22 年度の小・中学校の不登校児童生徒数の割合が 1.1%、高等学校では 1.7%である(平成 24 年子ども・若者白書)ことを考えると不登校を経験している比率は大変高い。文系と理系を比べた場合には、特に不登校の経験については差は見られなかった。

不登校の経験の有無

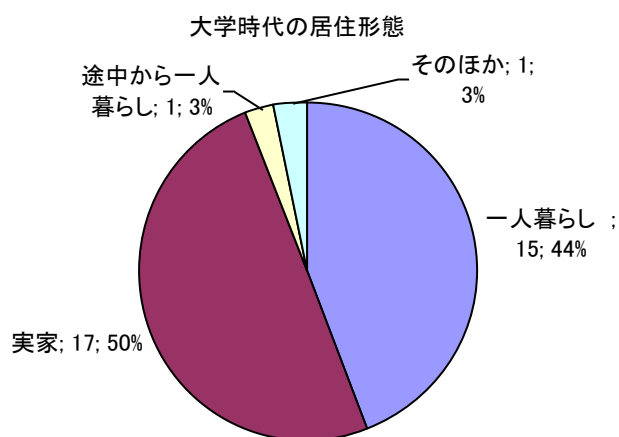


| 不登校の経験 |     |    |      |
|--------|-----|----|------|
| 文系     |     | 理系 |      |
| ない     | 8 名 | ない | 10 名 |
| ある     | 5 名 | ある | 5 名  |
| 不明     | 2 名 | 不明 | 1 名  |

## 【大学在学中の状況】

### ■2-1 大学時代の居住形態

住まいは15名（44%）が一人暮らし、17名（50%）が実家であった。全国大学生生活協同組合連合会による「学生の消費生活に関する実態調査（2011年調べ）」（以下「学生実態調査」）によると下宿生が52.0%で自宅生が45.2%であり、大学生全体と大きな差は見られない。

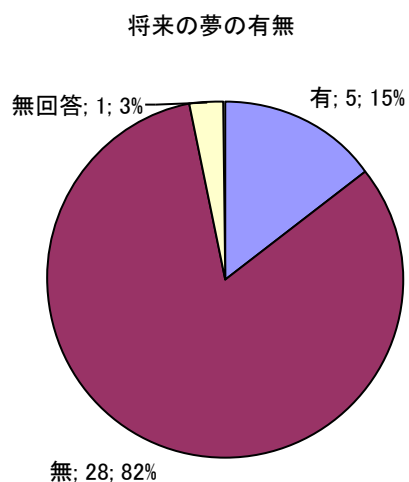


### ■2-2 生活費の負担

生活費の負担は、「全部親(または奨学金)」が31名（91%）、「大半が親(または奨学金)で一部自分」が3名（9%）、「大半が自分で一部親(または奨学金)」と「全部自分」は0名であった。

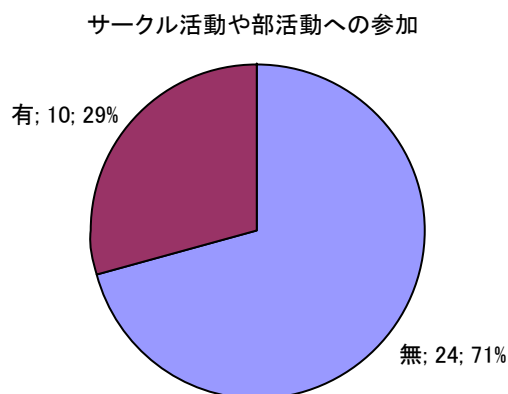
### ■2-3 将来の夢の有無

大学在学中に将来の夢を持っていたのは5名（15%）。



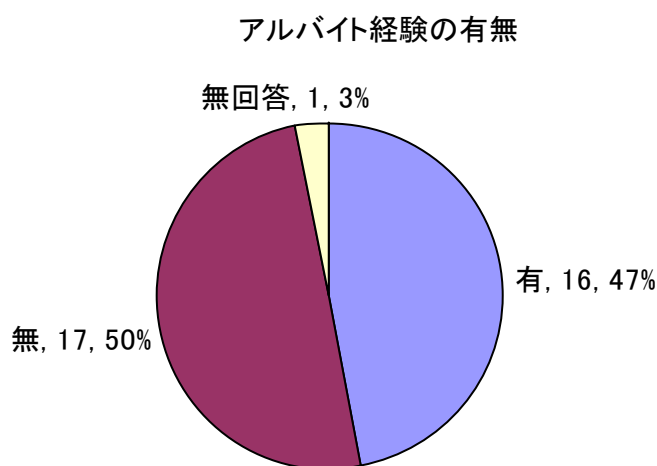
#### ■2-4 サークル活動や部活動への参加状況

サークル活動や部活動への加入率は 10 名 (29%) で学生実態調査によるサークル加入率 67.2%と比べると極めて少ない。



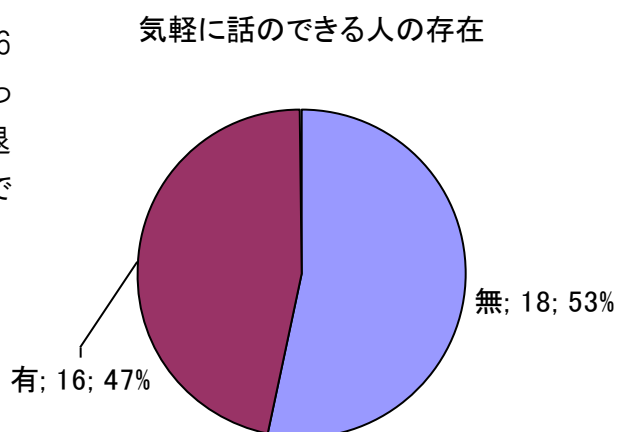
#### ■2-5 アルバイト経験の有無

アルバイトの経験は 16 名(47%)で、半数近くに経験があった。「学生実態調査」によると、調査時にアルバイトをしているか否かについての結果は、「している」が 63.1%、過去半年間のアルバイト経験については「した」が 72.7%であった。「学生実態調査」に比べると、中途退学者のアルバイト経験の割合は低いものの、2-4サークル活動や部活動への参加状況のように極端に低い割合ではなかった。



#### ■2-6 気軽に話のできる人の存在

話し相手の存在は、「話し相手がいる」は 16 名(47%)で「いない」が 18 名(53%)であった。約半数は話し相手がいることは、中途退学者が必ずしも在学中に孤立している状況ではないことがわかった。

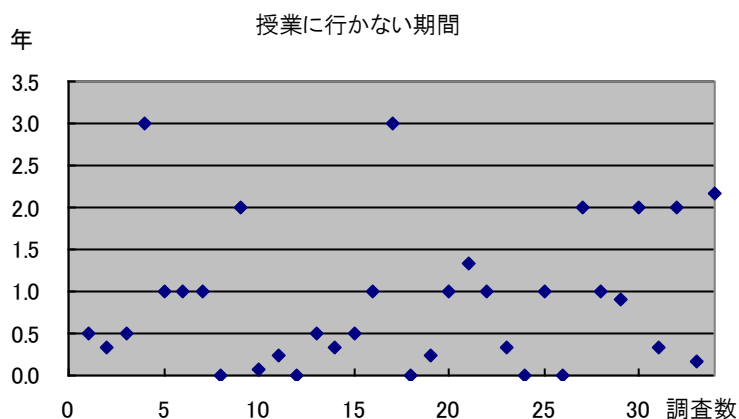


■2-7 授業の空き時間を過ごした場所（自由記載）

空き時間を過ごした場所で最も多かったのが「図書室」で 8 名、次に「空き教室」が 3 名、「サークル室」と「自分の部屋」が 2 名で、他には「学食」と「喫煙所」と「ゲームセンター」が 1 名ずつ、その他の者は特に決まっていなかった。

■2-8 授業に行かない時期

授業に行かない期間がある者は 34 名中 32 名で、ほとんどの者が授業に行かない期間を経てから退学している。授業に行かない期間は、平均すると 11 ヶ月であった。

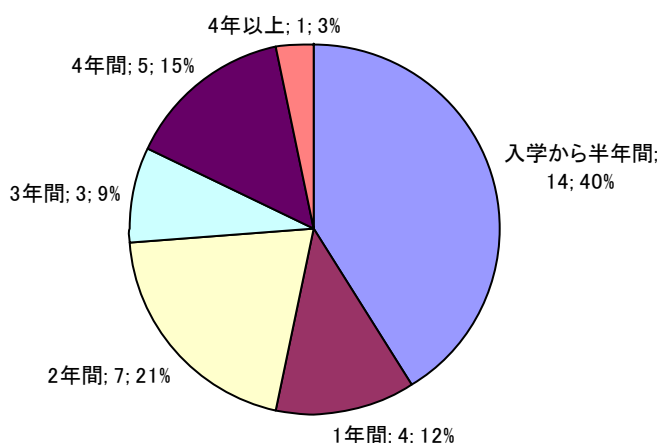


■2-9 退学を考えてから実際に退学するまでの期間

退学を考え始めてから実際に退学するまでの期間は最も長い場合で 2 年、平均すると 8.5 か月であった。

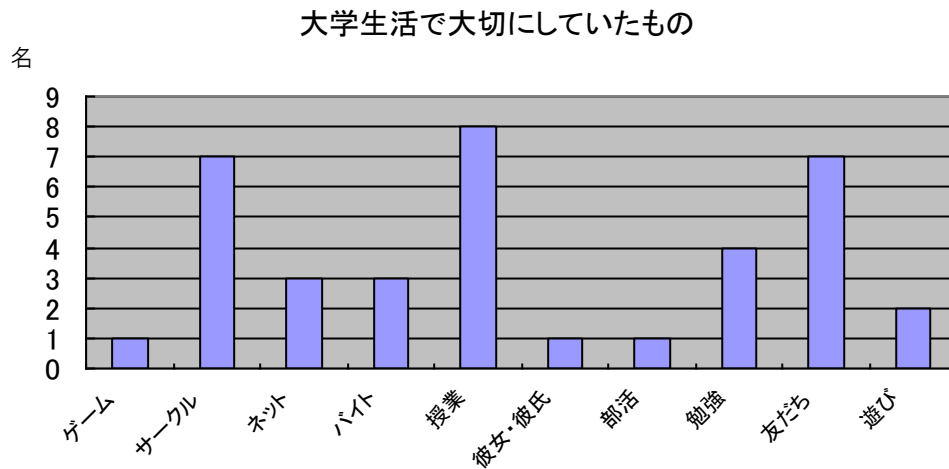
2-8 と 2-9 を比較すると、学校に行かなくなってから、中途退学を考え、一定期間を経て実際に中途退学を選択するという流れが見られる。そこで、1-5 中途退学をした時期から、2-8 授業に行かなくなった期間を引いて、授業に行かなくなる時期を割り出した。その結果 14 名(40%)が入学後半年経たない間に授業に行かなくなっていった。入学当初から授業に行かない結果、半年で退学したものは約半数、3 年まで在籍した者は 2 名(6%)あった。

退学時期から換算して授業に行っていた期間



■2-10 大学生活で大切にしていたもの（複数回答）

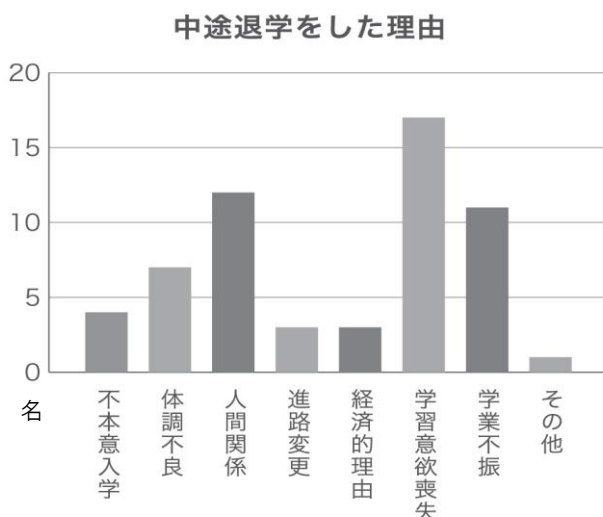
大学生活で大切にしていたもので最も多かったのは「授業」8名（21%）、次いで「サークル」と「友だち」が7名（19%）であった。「学生実態調査」では択一回答であるが、1位が「勉強や研究を第一においた生活」27.1%、2位は「特に重点をおかずほどほどに組み合わせた生活」で21.6%であった。



## 【大学等を退学するに至る過程】

### ■3-1 中途退学をした理由（複数回答）

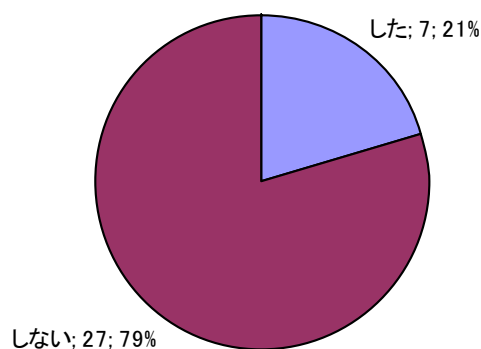
退学理由は「学習意欲喪失」「学業不振」が多く、もう一つの特徴として「人間関係」であった。「学習意欲喪失」にいたる理由は明確ではないが、「学習意欲喪失」をあげた17名のうち、合わせて「学業不振」をあげた者が7名（41%）、「人間関係」をあげた者が5名（29%）であった。



### ■3-2 学校を続けるための行動の有無

行動の有無については、「行動しなかった」が27名（79%）で、高い比率で行動していないことがわかる。日本中退予防研究所による「中退白書2010」（以下「中退白書」）においては、「問題解決のための行動」についての回答は「行動無し」が66%で、やはり過半数は行動していなかった。

学校を続けるための行動の有無

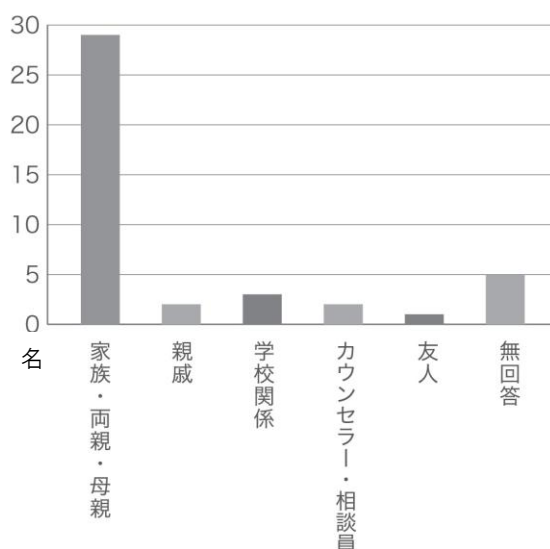




### ■3-3 退学を考えたときの相談相手の有無

退学を考えたときに相談をした者は30名(88%)。相談相手がいなかった者は4名(12%)であった。相談相手としては、「家族」が最も多かった。「中退白書」では「家族」がやはり最も多かったが、「友人」も同程度いた。今回の調査結果は家族が突出しているのが大きな特徴である。

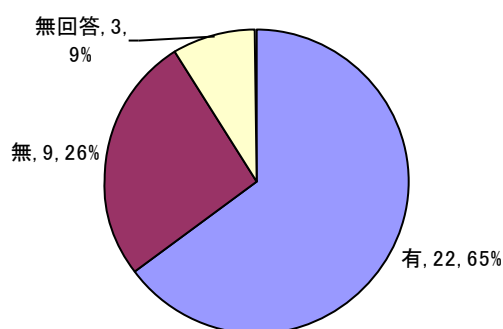
退学を考えたときの相談相手の有無



### ■3-4 相談相手からの引止めの有無

「相談相手から引止めがあった」と回答した者は22名(65%)。「中退白書」によると「引止められた」が38%、「引止めはなかった」が61%であり、「中退白書」と大きく差が出る形になった。

相談相手からの引止めの有無



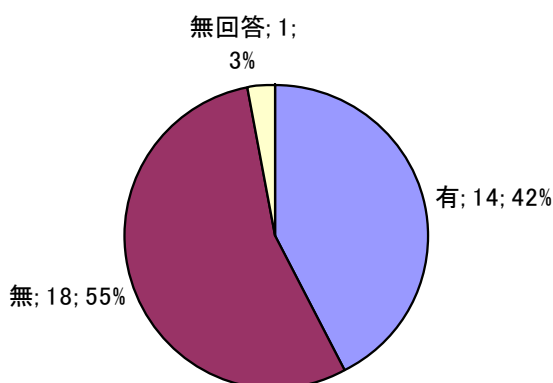
### ■3-5 親への報告の有無

親へは33名(97%)が報告し、報告しなかったのは1名(3%)であった。大学の退学の手続き上、親に連絡が必要な場合が多く、そのことが大きく影響していると思われる。

### ■3-6 親からの反対

親からの反対は18名(55%)がなかったと答えている。「中退白書」でも61%が反対しなかったと答え、同じような傾向が見られた。3-4で相談相手からの引止められた者が65%あった事、2-9で退学を考えたから実際に退学するまでの平均期間8.5か月であることを考えると、相談の段階と退学を決定したときの「家族」の対応が「引止め」から「引止められない」へ変化したと考えられる。

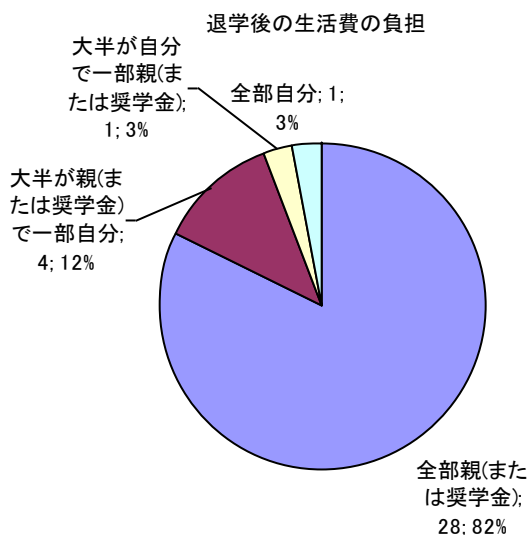
親からの反対の有無



## 【退学後の生活】

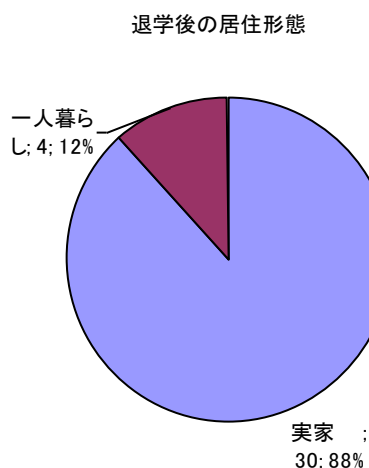
### ■4-1 生活費の負担

生活費については「全部親」または「大半が親」と答えた者は 32 名(94%)に達した。退学後も経済的な部分では親に依存していることがわかった。



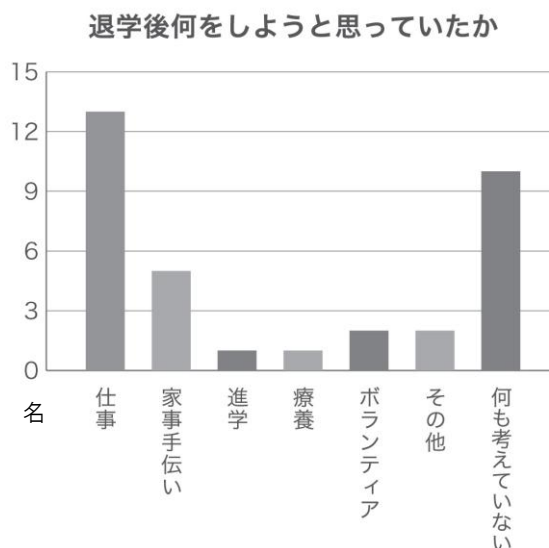
### ■4-2 居住形態

退学後の居住形態を大学時代と比べると、一人暮らしの比率が44%から12%へと大きく後退している。退学を機に実家に戻ったことがうかがえる。しかし、そのまま一人暮らしをしている者が1割いることもわかった。



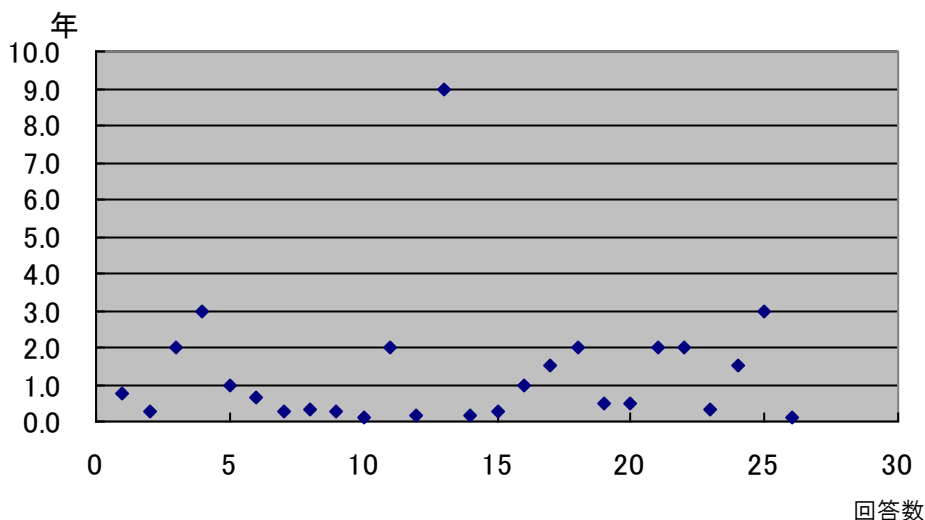
### ■4-3 退学後何をしようと思っていたか

退学後については、仕事と答えた者が 13 名(38%)と最も多かったが、一方で何も考えていないと答えた者が 10 名(29%)と次いで多い結果となった。



■4-4 退学後アルバイトや就職活動など次の活動をスタートさせるまでの期間

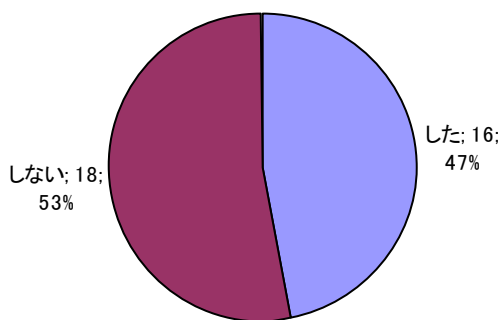
活動をスタートさせるまでの期間は平均で 1.3 年であった。1 年未満の比較的早い時期に動き出す傾向が見られ、半年未満で動き出す者も 9 名 (26%) いる。しかし、2 年以上経ってから動く者も 8 名 (24%) いることから、何らかの支援の必要性が見える。



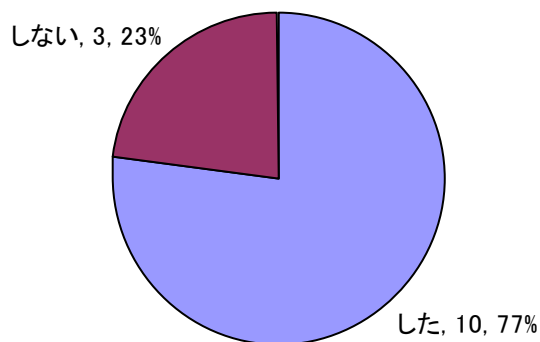
■4-5 退学後の就職活動

中途退学後に就職活動を行った者は 16 名 (47%)にとどまり、しなかったと答えた者は 18 名 (53%)であった。但し 4-3 の質問に対し、「仕事」と答えた 13 名に絞ってみると、就職活動を行ったものは 10 名 (77%)に達する。中退に当たっての本人の意識の差が行動にも現れていると考えられる。

退学後の就職活動 全体



退学後仕事をしようと思った者の就職活動の有無



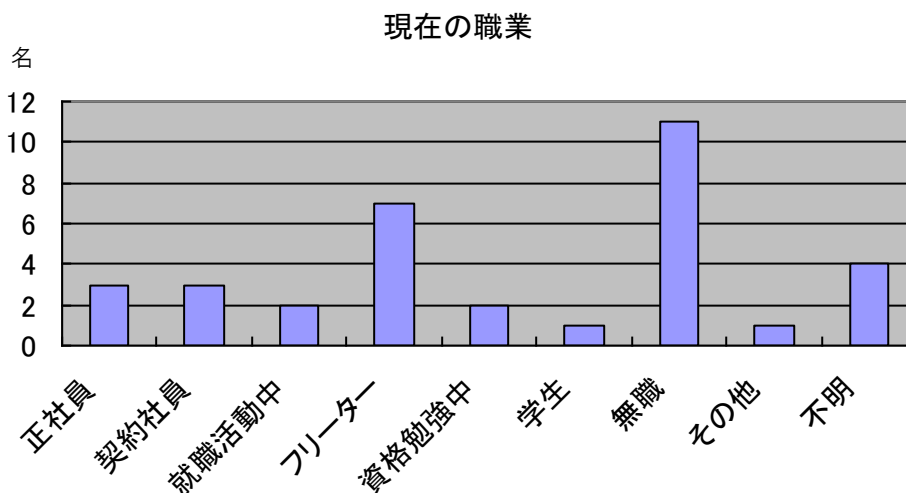
#### ■4-6 就職活動中に困ったこと

実際に就職活動を行っている比率が低いことから回答数が少ないが、困っている内容については、中途退学というマイナスイメージを転換できないことが共通点として見られる。

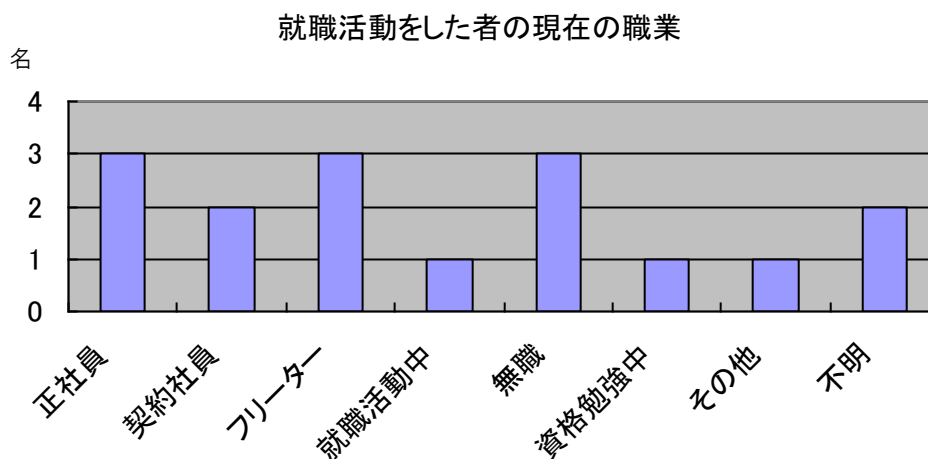
- ・ 中途退学はプラスにならないので困っている。
- ・ 学歴を履歴書にかけない。
- ・ 年齢、中退の学歴、職務経験、就職活動と一緒にいる友達が居ない。
- ・ 退学したことが就職活動にマイナスに働いてしまった。
- ・ 不安をわかってもらえないこと、何をしたら良いかわからないこと。
- ・ 自分に自信がもてない。
- ・ 募集要項にあてはまらない。
- ・ 退学したことにより最終学歴が高卒となるため、卒業後6年たつてしまいでここに就職活動の相談に行けば良いのかわからない。既卒扱いになるため中途採用での募集を探すが無も自分に強みがない。

#### ■4-7 現在の職業

現在の職業は無職が11名(32%)と最も多く、次にフリーター7名(20%)であった。4-5で見られるように53%が就職活動をしていないことから、就業率が低いと考えられる。その一方で仕事についている者のうちフリーターが最も多く7名、正社員が3名、契約社員が3名であった。



4-5 で就職活動をしたと答えた者 16 名に絞ってみると、8 名が就職している。



現在就職をしている 12 名に絞って、「授業に行かなかった」「退学を考えてから退学するまで」「退学後次の活動を始めるまでの期間」を『立ち止まり孤立している時間』と考えて参考までに書き出した。

| 現在の職業   | 授業に行かなかった期間 | 退学を考えてから退学するまで | 退学後次の活動を始めるまでの期間 |
|---------|-------------|----------------|------------------|
| 正社員 A   | 不明          | 1 年            | すぐ               |
| 正社員 B   | 4 か月        | 4 か月           | 2 年              |
| 正社員 C   | 6 か月        | 6 か月           | 2 週間             |
| 契約社員 D  | 1 か月        | 5 か月           | 4 か月             |
| 契約社員 E  | 2 年         | 2 年            | 1 年 6 か月         |
| 契約社員 F  | 2 年         | 2 年            | 3 年              |
| フリーター G | 3 年         | 1 年            | 2 年              |
| フリーター H | 1 年         | 2 年            | 1 年              |
| フリーター I | 3 か月        | 3 か月           | 3 か月             |
| フリーター J | 1 年 4 か月    | 1 年 4 か月       | 1 年              |
| フリーター K | 不明          | 不明             | 不明               |
| フリーター L | 2 年         | 不明             | 2 年              |

以上

参考文献)

内閣府「平成 24 年子ども・若者白書」平成 24 年 9 月 30 日

日本中退予防研究所「中退白書 2010-高等教育機関からの中退-」2010 年 6 月 21 日

全国大学生生活協同組合連合会「第 47 回学生の消費生活に関する実態調査」2011 年 10 月実施

【調査票】

|   |  |                   |                   |
|---|--|-------------------|-------------------|
| <p>大学等の中途退学者への対応状況についての調査[大学・短期大学用]</p> <p style="text-align: center;">中途退学者に関わる課題・支援検討委員会</p> <p>・この調査は、社会的に孤立しがちな、大学等高等教育機関を中途退学した者に対する支援策を検討するにあたり、大学の対応状況を把握するために行うものです。必要な支援策、求められる支援策を実行に移したいと思いますので、ご協力をお願いいたします。</p> <p>・なお、この調査は栃木県内の全大学・短期大学を対象にしています。調査結果については全体の結果を公表しますが、個別の内容は公表いたしません。</p> |  |                   |                   |
| <p>問1】あなた自身のことについて、次の質問にそれぞれ教えてください。</p>  |  |                   |                   |
| 1-1   | あなたの性別（○1つ）                            | 男                 | 女                 |
| 1-2   | あなたの年齢                                 |                   | 歳                 |
| 1-3   | あなたの居住地                                | 栃木県               | 市・町               |
| 1-4   | 退学した教育機関                               | 大学                | 学部                |
| 1-5   | 退学した時期                                 | 入学後               | 年 月 日 頃           |
| 1-6   | 大学等以前の不登校・退学経験                         | 有                 | 無                 |
|   | 不登校経験                                  | 有                 | 無                 |
|   | 退学経験                                   | 有                 | 無                 |
| <p>問2】大学等に在学中の生活について、次の質問にそれぞれ教えてください。</p>  |  |                   |                   |
| 2-1   | 居住形態をお答えください。（○1つ）                     | 実家                | 一人暮らし             |
|   |  | 途中から一人暮らし         | 寮                 |
|   |  | その他               |                   |
| 2-2   | 学費・生活費の負担はだれが担っていましたか                  | 全部親(または奨学金)       | 大半が親(または奨学金)で一部自分 |
|   |  | 大半が自分で一部親(または奨学金) | 全部自分              |
| 2-3   | 将来の夢はありましたか。（○1つ）                      | 有                 | 無                 |
|   |  | 有                 | 無                 |
|   | 有と答えた方は内容を記入ください。                      |                   |                   |
| 2-4   | サークル活動や部活動はしていましたか。（○1つ）               | 有                 | 無                 |
|   |  | 有                 | 無                 |
|   | 有と答えた方は内容を、無と答えた方は活動に参加しなかった理由を記入ください。 |                   |                   |

|   |   |    |       |
|---|---|----|-------|
| 2-5 アルバイトの経験はありますか。(○1つ)                                | 有 | 無  | 無回答   |
| 有と答えた方は内容を、無と答えた方はしなかった理由を記入ください。                       |   |    |       |
| 2-6 気軽に話をできる人はいましたか。(○1つ)                               |   | 有  | 無     |
| 有と答えた方はその関係を記入ください。                                     |   |    |       |
| 2-7 授業の空き時間はどこで過ごしていましたか。                               |   |    |       |
| 2-8 授業に出席しない時期はありましたか。(○1つ)                             |   | 有  | 無     |
| 学校に行かない期間 年 か月  |   |    |       |
| 2-9 退学を考え始めてから、実際に退学するまでの期間はどのくらいですか。                   |   |    |       |
| 退学するまでの期間 年 か月  |   |    |       |
| 2-10 大学生活で大切にしていたことは何ですか、当てはまるもの全てに○をつけてください。           |   |    |       |
| 授業 勉強 研究 サークル 部活 バイト 仕事 友だち<br>彼女・彼氏 遊び ギャンブル ネット ゲーム   |   |    |       |
| <b>問3】</b> 大学等を退学に至る過程について、次の質問にそれぞれ答えてください。            |   |    |       |
| 3-1 退学した理由を下記から選んでください。(当てはまるもの全てに○)                    |   |    |       |
| 学習意欲喪失 人間関係 進路変更 不本意入学 学業不振<br>体調不良 経済的理由 その他           |   |    |       |
| 「人間関係」を選んだ方はその内容を具体的にお書きください。                           |   |    |       |
| 進路変更を選んだ方はその内容を具体的にお書きください。                             |   |    |       |
| 3-2 学生を続けるために何か行動しましたか。(○1つ)                            |   | した | しない   |
| 「した」と答えた方は内容を記入ください。                                    |   |    |       |
| 3-3 退学を考えた時期に相談した人はいましたか。(○1つ)                          |   | 有  | 無     |
| 有と答えた方はその関係を記入してください。                                   |   |    |       |
| 3-4 3-3であると答えた方に伺います。相談相手からの退学の引止めはありましたか。(○1つ)         |   | 有  | 無 無回答 |
| 3-5 退学を決める前に親への報告はしましたか。                                |   | した | しない   |
| 3-6 3-5で「した」と答えた方にうかがいます。親からの反対はありましたか。                 |   | 有  | 無 無回答 |
| <b>問4】</b> 大学等退学後の生活について、次の質問にそれぞれ答えてください。              |   |    |       |
| 4-1 生活費の負担はだれがしていましたか。(○1つ)                             |   |    |       |
| 全部親(または奨学金) 大半が親(または奨学金)で一部自分<br>大半が自分で一部親(または奨学金) 全部自分 |   |    |       |

|     |  |        |            |
|-----|--|--------|------------|
| 4-2 | 居住形態についてお答えください。(○1つ)                      | 実家     | 一人暮らし      |
| 4-3 | 退学後は何をしようと思っていましたか、また何をしましたか(○1つ)          | 仕事     | 家事手伝い      |
|     |  | 進学     | 療養         |
|     |  | ボランティア | 何も考えていない   |
|     |  | その他    |            |
| 4-4 | 実際にアルバイトや就職活動など次の活動をスタートするまでの期間はどのくらいですか   | 概ね     | 年 か月       |
| 4-5 | 退学後に就職活動はしましたか(○1つ)                        | した     | しない        |
| 4-6 | 3-5で有りと答えた方に伺います<br>就職活動中に困ったことはありますか(○1つ) | 有      | 無          |
|     |  |        | 無回答        |
|     | 有と答えた方は内容を記入ください                           |        |            |
| 4-7 | 現在の職業をお答えください。(○1つ)                        | 正社員    | 契約社員       |
|     |  | 派遣社員   | 自営業        |
|     |  | 就職活動中  | フリーター      |
|     |  | 資格勉強中  | 学生         |
|     |  | 無職     | 不明         |
|     |  |        | ボランティアスタッフ |



### 調査概要

|      |                                   |
|------|-----------------------------------|
| 実施機関 | 中途退学者の課題・支援検討委員会                  |
| 調査期間 | 2012年11月～2013年1月                  |
| 調査対象 | 栃木県在住の概ね35歳以下の大学等高等教育機関からの中途退学経験者 |
| 抽出方法 | アンケート調査回答者の中から同意の得られた者            |
| 調査方法 | 面接                                |

#### 個別ヒアリング A (30歳 男性)

##### 1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

人間関係が築けなかった。自分から積極的にならないと人間関係が築けない。

##### 2 在学中の人間関係の悩みの内容

授業の中で、グループで実験をする機会があったが、一緒のグループになった学生と全くコミュニケーションが取れなかった。

##### 3 何が改善されたらやめなかったか

途中から授業についていけなくなったが、その時に頼れる人、聞ける人がいれば違ったのではないかと思う。

##### 4 一番きつかったことは何か

大学の中で、1人であることが多かったこと。

休み時間などもどうしていいかわからず図書館などに行っていた。

##### 5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

人間関係がうまく築けること。

サークルなどに入っていればよかったのかもしれない。

##### 6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

わからない

##### 7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

何もせず家にいることが多かった。食器洗いなどたまに手伝いをしていた。

##### 8 中退してよかったこと、悪かったこと

よかったことは、朝早く起きなくてもよくなったこと。

悪かったことは、授業料が無駄になってしまって申し訳ないということ。

##### 9 中退した人に必要な支援の内容

仕事に限らず、社会参加（ボランティアなど）の機会を提案してくれたり、斡旋してくれたりする場所。

##### 10 なぜ中退する学生が多いと思うか

人付き合いがうまくいかないと、1人になってしまう。

孤立してしまうと、モチベーションが保てない。

11 現在不安なことの内容

自分に合った仕事が見つかるのか、自分に合った仕事はあるのかということ。

12 現在挑戦していることの内容

介護のボランティアに週2回、学童のボランティアに週1回行っている。

体力づくりのために、たまにウォーキングしている

13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

学校に相談室はあるが、なかなか気軽に行けない。

もっと気軽に相談に行ける場所があればいいなと思った。

14 もととの家族との関係

関係性は良いとはいえない。子どもの頃はそんなに悪いということはないが高校生くらいから、あまり話さなくなった。

一方的に口うるさく言われることが嫌で、避けるようになった。

個別ヒアリング B (22歳 男性)

1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

人間関係をつくるために、積極性と努力が必要。

自分が動かなければ、簡単に、あっという間に孤立してしまう。

孤立してしまうと、情報が入ってこない。大学では情報交換できる人がいることはすごく重要だと思う。

2 在学中の人間関係の悩みの内容

悩みを共有できる人がいなかった。

授業で分からないことがある時は先生に聞いていたが、先生としかコミュニケーションを取っていなかった。

3 何が改善されたらやめなかったか

孤独に負けない固い決意・覚悟。

不安な時や悩んだ時に安心して話せる人がいれば。(学生以外でも)

4 一番きつかったことは何か

大学で孤立状態になり、人と関わらなくなったことで、どんどん人と関わりたくないという気持ちが強くなってしまった。最終的には、先生に質問することも嫌になってしまった。

5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

お金は重要だと思う。

入学当初、仲間が欲しいなと思ってサークルに入ろうと思ったが、入ろうと思ったところが結構お金のかかる場所だったので結局入らなかった。アルバイトでもすればよかったのかもしれないが・・・。

6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

大学の先生や職員が、もう少し親身になってくれればと思った。

中退する時も辞める時も、すごく事務的で理由を聞いてもくれずあっさり受理された。

学校内の相談室でカウンセラーにも相談していたが、大学側とはまったく連携などは取って

いないようだった。

7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

中退したことで、将来に対して絶望し、1～2ヶ月は何もせずに家で落ち込んでいた。

8 中退してよかったこと、悪かったこと

辞めた直後はいいことなんて何もないと思っていたが、今になってみると、大学を辞めたことがきっかけで、支援団体などと繋がり、人間関係を築けるようになるためのサポートを受けられて、新たな出逢いが増えた。

悪かったことは、経歴に「中退」があると今後色々な場面で印象が悪かったり、偏見を持たれたりするんだらうなということ。

9 中退した人に必要な支援の内容

自分は人間関係でつまづいたので、その問題を解決しないまま社会にでるのは恐怖でしかない。なので、人間関係づくりを学べる場所や人慣れするような機会を提供してくれるような支援が自分は一番必要だと思う。

10 なぜ中退する学生が多いと思うか

「なんとなく」進学する人が多いからではないか。

大学は「なんとなく」入ってしまうと、卒業するのは難しい。

あとは、高校までは義務教育みたいな感じで「絶対卒業しなくちゃ」という感覚があるが、大学卒業はそこまでの強い義務感がないような気がする。

11 現在不安なことの内容

「中退」という経歴に加えて、中退した後も仕事をしていただけではないので、自分には空白期間がある。それで、アルバイトを電話の段階で断られたことがあるので、就職活動はすごく不利になるんだと思った。一度レールから外れてしまった自分は、もう二度と社会というレールには戻れないのではないかという漠然とした不安が常にある。

12 現在挑戦していることの内容

アルバイトをしようと求職活動をしている。

単発のアルバイトをしている。

13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

孤立防止のために、サークルや部活の義務化。

必ずどこかには所属しているという状況があると人間関係も作りやすいし安心感がある。

14 もともとの家族との関係

家族との仲は良いと思う。

親から何かを強制させられたことはないし、自分も反抗期などもなかった。

大学を辞める時には、最初に母親に話をしたが何となく分かっていたようで、特に反対はされなかった。

個別ヒアリング C (26歳 女性)

1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

授業の内容が難しくついていけなくなってしまった。

2 在学中の人間関係の悩みの内容

介護系の学校だったが、試験に受からないと実習に行かせてもらえなくて、自分は試験に合格しなかったので、一緒に通っている他の学生との関係にも溝が出来てしまった。

3 何が改善されたらやめなかったか

人間関係がうまく築けていれば。

4 一番きつかったことは何か

試験に受からなかったことで、次のステップに進めなかったこと。

5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

コミュニケーション能力。

6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

学校に通っている人以外にも、色々な人と関われる機会が学校の中にあればいいと思う。

7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

ほとんど外出せず、家にこもっていた。家の手伝い（家事）はしていた。

8 中退してよかったこと、悪かったこと

良かったことは、少し気持ちが楽になったこと。

悪かったことは、ちゃんと卒業すればよかったという後悔の気持ちがあること。

9 中退した人に必要な支援の内容

中退した後、どんな選択肢があるかアドバイスなどをしてくれるなど、総合的なサポートをしてくれる場所。

10 なぜ中退する学生が多いと思うか

自分は親にすすめられて進学したが、自分のしっかりとした意思がないと難しいと感じた。自分のような人が多いのではないか。

11 現在不安なことの内容

新しい環境や人になじめるかどうか。

12 現在挑戦していることの内容

週に1回、障害者の就労施設で、パンの配達・販売のアルバイトをしている。

13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

どんな事でも、困った時に相談できる場所、窓口。

14 もともとの家族との関係

家族とは仲が良い。よく相談や話もするし、一緒に買い物に出かけたりもする。

親には感謝している。

### 個別ヒアリング D（22歳 男性）

1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

中学、高校でもずっと人間関係を築くことができずにいたので、大学進学の際に、「絶対につまづくだろうな」という確信があった。なので、あまりイメージの変化というものはなく、「やっぱりな」という感じだった。

2 在学中の人間関係の悩みの内容

そもそも「人間関係」を築けていないので、他者との関係において悩みはない。

3 何が改善されたらやめなかったか

たとえ孤立していても、自分の中で目的意識を強くもっていれば続けられたのではないか。  
あとは、授業についていけなくなってしまったので、授業についていける能力があれば。

4 一番きつかったことは何か

下宿先が通っていた大学の学生専用のアパートだった。自分以外の人達は、いつも誰かの部屋に集まって明け方まで楽しそうにワイワイ騒いでいた。自分はいつも部屋に1人で「勉強が出来なくても、ああやって騒いでいる人達の方が上手く世の中を渡っていけるんだろうな」などと考えていた。それが結構つらかった。

5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

よくわからない。

6 中退に際して「どのようなサービスがあるか」という内容

わからない。

7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

たまに買い物やレンタルショップに行く以外は、ほとんど出かけなかった。

8 中退してよかったこと、悪かったこと

よかったことは、自由になったと感じたこと。(解放された感じがした)

わるかったことは、お金をかけてもらったのに何にも形にならなかったこと。

9 中退した人に必要な支援の内容

全額とまではいなくても、学費返金サービス(制度)的なものがあれば。

10 なぜ中退する学生が多いと思うか

なんとなく進学したり、惰性で行っている人が多いからだと思う。

11 現在不安なことの内容

これから先、何かをはじめようとしたときに「自分は何も出来ないのではないか」ということ。

12 現在挑戦していることの内容

体力をつけるために、外出の時などはなるべく歩くようにしている。

13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

単位を落とした時に、追試を受けられる制度があればよい。

14 もともとの家族との関係

悪くはない。仲は良いほうだと思う。

大学を辞める時はゴタゴタがあった。とても人に言えるようなことではない。

### 個別ヒアリング E (24歳 男性)

1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

もっと自由に授業を履修できるのかと思っていたが、意外と制限が多く、特に1年の時には必修も多いので、自由度が低いんだなと思った。

2 在学中の人間関係の悩みの内容

地元色が強い大学で、入学時点ですでに人間関係が出来ている感じがした。

自分は他県からの進学だったので、輪に入り込みづらい雰囲気があった。

あとは、留年したので下級生と同じ授業を受けたが、自分は留年しているというのがあるの

で、話かけられても積極的に関係性を築こうという気持ちになれなかった。

### 3 何が改善されたらやめなかったか

人間関係が築けていれば違ったと思う。同じ学生という立場に限らず、大学以外でもいいから信頼し、心を許せる人が1人でもいれば。

### 4 一番きつかったことは何か

孤立し1人である時間が長くなってしまったことで、どんどん人と居ることが出来なくなっていった。買い物にも行けなくなってしまふほど悪化し、体重が激減してしまった時(15kg位)は本当にこのまま死んでしまうのでは?という所まで考えた。

### 5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

人と積極的に関わっていける力や人脈。恋人など支えになってくれる存在。

あと、お金は重要だと思う。自由になるお金がないと、人間関係も含めて行動は狭まる。

### 6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

大学をもっとオープンな場所にして欲しい。

例えば、「公開授業」を定期的に設けて、学生だけではなく色々な年代や地域の人などと関われるきっかけのような場所があるといいと思う。

### 7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

1ヶ月くらいは何もせずボーっとしていた。その後、車の免許を取りに教習所に行き、その後は、もう1回進学をしようと思っていたので、ひたすら勉強していた。

### 8 中退してよかったこと、悪かったこと

自分の中の固定観念が壊れたこと。中退するまでは、大学に進学することも含めて人生の選択肢が自分の中で「1つ」しかなかったが、中退したことで色々な生き方があることを知ったし、可能性が広がったと感ずることもある。

悪かったことは「大卒以上」が条件のもの(就職や資格など)が選択肢として選べなくなってしまったこと。

### 9 中退した人に必要な支援の内容

「就職」「進学」など決まった進路に特化しない、総合的なサポートセンターのような場所。定期的に通って色々経験しながら、自分の中で方向性が決まったら、そこに向けてアドバイスやサポートを受けられるような柔軟な対応をしてくれる場所。

### 10 なぜ中退する学生が多いと思うか

今の時代は、目的意識がなくても大学に進学できてしまうこと。

それと、一度入学してしまうと、「転校」「転部」などの制度がないので、行きづまってしまうと、「中退」するしかないということになってしまう。

### 11 現在不安なことの内容

この先、「中退」という自分の経歴が色々な場面でネックになるのではないか、ということ。自分は気にしていなくても、周囲はそこに注目すると思うので。

### 12 現在挑戦していることの内容

不定期だがアルバイトに挑戦している。

筋トレをして身体を鍛えている

### 13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

大学進学を機に、それまで包丁もろくに持ったことがないのに自炊をしなくては行けない状

況があったので、希望者を募って簡単な料理教室のようなものがあると助かると思った。

#### 14 もととの家族との関係

家族仲は悪くない。姉と妹がいて、いつもにぎやかにしていたので自分は黙っていることが多かった。基本的には受け身。

父親は普段は寡黙で物静かだが、いざという時はやはり父親が強いというか、最終的には父を頼りにするという感じ。

### 個別ヒアリング F (25歳 女性)

#### 1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

自分の目標に向かって頑張りたいという気持ちで入学したが、学校の雰囲気や周囲の人達との関係で悩みが大きくなってしまった。

#### 2 在学中の人間関係の悩みの内容

女友達との関係性。

嫌われたくない、一人になりたくないという気持ちが強すぎて、仲良くなった女の子に執着してしまい、結果その友達が自分の気持ちを負担に感じて離れてしまった。

#### 3 何が改善されたらやめなかったか

中退した当時の自分は、全く心に余裕がなくて、気持ちの切替えが出来なかった。

#### 4 一番きつかったことは何か

人間関係のトラブルを抱えたことで、授業に出られなくなり、結果単位が取れなくなってしまった。

#### 5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

気持ちの切替えができること。

人間関係にとらわれない強い意志や目的意識をしっかり持っていること。

#### 6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

カウンセラーなど、学校での悩みを相談できるような相談室のような窓口があれば。(自分が通っていた学校にはそういったところがなかった)

#### 7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

人と会うことが嫌になり、家から出られない状態。

家で手伝いなどはしていたが、家族への負い目・罪悪感が強かった。

親に勧められて支援団体に行ったが、最初は嫌々という感じだった。でも、支援団体に行くようになったことがきっかけで、徐々にまた人と関われるようになった。

#### 8 中退してよかったこと、悪かったこと

良かったことは、苦しんでいた人間関係から解放されたと感じたこと。

悪かったことは、自分の夢・目標を絶たれてしまったこと。

#### 9 中退した人に必要な支援の内容

まずは家族や身近な人が苦しみを理解し、気持ちに寄り添ってくれるということ。

#### 10 なぜ中退する学生が多いと思うか

目標を持って入っても、人間関係が上手くいかずにつまづいてしまう人が多いのではないかと

と思う。

#### 11 現在不安なことの内容

自分の次のステップを考えた時に、明確な目標がもてないこと。将来に対して漠然とした不安がある。

#### 12 現在挑戦していることの内容

人間関係の築き方、付き合い方。

#### 13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

1人でくつろげるようなスペース、場所が学校の中にあるとよい。

集団の中で1人という状態だとつらいので、気兼ねなく1人で過ごせる場所があると逃げ場になる。

#### 14 もともとの家族との関係

家族仲は決して悪くはないと思うが、弟が自分に比べてコミュニケーション能力も高く自分を発揮できるタイプで、親ともよくコミュニケーションを取っていた。

どこかで弟に対する嫉妬とか、親が自分を見てくれていないのではないかという不安感が常にあったような気がする。

### 個別ヒアリング G (32歳 男性)

#### 1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

大学はもっとゆるやかな場所だと思っていたが、意外と全力で頑張らないといけないなと思った。自発性が求められる。自分から動いていかないとついていけなくなる。

#### 2 在学中の人間関係の悩みの内容

特にはなし。人間関係は課題ではなかった。

#### 3 何が改善されたらやめなかったか

途中でモチベーションが下がった時に、思い切って休学という選択をすればよかった。

7年間在学したが、最終的には卒業が出来ないことが確定した時点で中退した。

卒業論文に着手するために必要な単位が7年間で取得できなかった。

#### 4 一番きつかったことは何か

小さい頃から、勉強も習い事も自分の意思で決めるという事は許されなかった。

なので、モチベーションが下がっても休学という選択が出来ずだらだらと在学してしまった。自分の意思で決められなかったことが一番つらかったこと。

#### 5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

「自分の意思で決めて行く」ということ。今は「なんとなく」進学できてしまう。

大学は入るのは簡単だが、卒業するのは大変。自分の意思で決めていけば、辛いことも乗り越えられるが、そこに自分の意思がないとモチベーションが保てない。

#### 6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

通っていた大学は、3年までに所定の単位が取れないと、研究室やゼミなどの明確な「所属」がなくなってしまう。そうすると孤立状態になってしまうので、何かしらの所属があるといいのでは。そうすれば学校に来ていない状況などもわかる。

#### 7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は



やる気がなくなり、ひきこもっていた。行動範囲は家の中のみ。

用事が無い限り、ほとんど外には出ていない。

#### 8 中退してよかったこと、悪かったこと

よかったことは1つもない。悪かったことは、やはり仕事を探す上で、経歴に「中退」の文字があると不利だということ。また、大卒以上という条件の仕事には応募できない。

#### 9 中退した人に必要な支援の内容

中退後やる気がない時に、「若者の居場所」があるなどと言われても、はっきり言ってそんな所にいってもしょうがないと煩わしい気持ちだった。

本の中の言葉に励まされたりもしたが、必要なことは、具体的にこんな道があるなどの選択肢や意欲が高まるような場所。

#### 10 なぜ中退する学生が多いと思うか

「目的」「意思」「意欲」がなくても大学に入れてしまうこと。また入ってしまうこと。

#### 11 現在不安なことの内容

雇用状態が安定しないこと。現在1年契約で働いているが、来年度更新が無い場合、また就職活動することになるが、中退していることと、何もしないで過ごした時期があるので、就職活動する上では不利だと思っている。次の仕事が見つかるかどうか。

#### 12 現在挑戦していることの内容

継続して働くこと。

#### 13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

大学には相談室があるが、大学を辞めたいという相談があった時に、ただ大学に引き止めるということではなくて、本当に続ける事が難しいなら早い段階で他の選択肢について提案するという対応。大学に入ると、授業に追われじっくり自分と向き合う時間がない。1年などの早い段階で、方向性を示せるような工夫が必要ではないか。

#### 14 もともとの家族との関係

自分の意思を伝えても無駄という思いがある。

子どもの頃から、勉強や習い事などは自分で選んだことはない。

自分がやりたいと訴えたことはダメと言われ、親がやれということをやってきた。

自分の希望や意思を訴えても退けられ続け、その挙げ句「お前は何がやりたいんだ」と言われた。それを繰り返すうちに失望し、自分の気持ちは話さなくなった。

### 個別ヒアリング H (24歳 女性)

#### 1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

思っていた以上に自主性が求められる場所だと思った。

履修登録や情報収集など、全て自分が管理していないと大学生活が成り立たない。

#### 2 在学中の人間関係の悩みの内容

完全に孤立してしまったこと。情報収集なども全然出来なかった。

何とか関係性が築ければと、サークルや部活に入ったが続けることが出来なかった。

人間関係についても、かなり積極的に動いていかないと、簡単に孤立してしまうと思った。

#### 3 何が改善されたらやめなかったか

もう少し自分に、自発性と積極性があれば。

4 一番きつかったことは何か

サークルや部活に参加するなど、自分なりに努力はしてみたが、人間関係を築くことができなかったこと。

5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

よくわからない。

6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

特に思い当たらない。

7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

中退し、実家に戻ってからは家にいることが多かった。

たまに家族が外に連れ出してくれた。

8 中退してよかったこと、悪かったこと

よかったことは、支援団体に繋がるきっかけになったということ。

それまでは、進学して就職するという生き方しか選択肢がなかったし、「こうでなきゃいけない」という固定観念が強くあったが、色々な生き方があっていいんだと思うことができた。

悪かったことは、世間的に、自分の社会的立場がなくなってしまったこと。

何をしている人ですかと聞かれた時に、答えることができなかった。

9 中退した人に必要な支援の内容

一度レールから外れてしまった人に対して、また社会に戻れるためのきっかけやチャンスとなるような場所。

10 なぜ中退する学生が多いと思うか

よくわからない。

11 現在不安なことの内容

今は特にない。

12 現在挑戦していることの内容

特にない。

13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

よくわからない。

14 もととの家族との関係

関係性は悪いとは思わないが、常に一定の距離感があり、お互いにあまり踏み込まないという感じ。けんかなどもしたことがない。中退に際して相談はしたが、反対はされなかった。

個別ヒアリング | (26歳 男性)

1 入学前後で大学に対するイメージ変化の内容

思っていたより忙しい。

2 在学中の人間関係の悩みの内容

人間関係については、中退の直接的な要因ではないが、相談できる人がいたら違っていたかもしれないと思う。

3 何が改善されたらやめなかったか

自分自身の問題。強い意志と目標があれば。

4 一番きつかったことは何か

「きついな」と思えるほど頑張っていない気がする。

そこ（大学）にいること自体がつかった。

5 大学生活を満喫するために必要な要素の内容

心身の充実、モチベーション、目的意識。

6 中退に際して「どのようなサービスがあるといいと思うか」の内容

大学を中退してしまうと、「高卒」扱いになってしまう。

大学に在籍した期間（中退までの）の、在籍証明書のようなものが欲しい。

7 中退直後はどんな風に過ごしていたか、行動範囲は

家にこもっていた。アルバイトの面接に数回行ったが全部落ちてしまった。

将来に対して絶望していた。

8 中退してよかったこと、悪かったこと

良かったことなんてない。

悪かったことは、自分の人生に対して一切希望を持てなくなった。

9 中退した人に必要な支援の内容

一度レールから外れてしまった人に対して、また社会に戻れるためのきっかけやチャンスとなるような場所。自分にとっては支援団体がそうだったかもしれない。

藁にもすがりたいような気持ちだった。

10 なぜ中退する学生が多いと思うか

目的意識やモチベーションが保てないと大学を続けるのは難しい。

そこがしっかりしていれば、中退ということにはならないのでは。

11 現在不安なことの内容

将来に対して、漠然として不安が常にある。

12 現在挑戦していることの内容

「挑戦」と言えるようなことは特にない。

13 必要だと思う学生向けのサービスの内容

最初が肝心だと思う。自分が行った大学のオリエンテーションは、一方的に説明を聞くという形で半日くらいで終わってしまった。

自分の目的や目標を確認したり、関係性を作るという目的のオリエンテーションの時間を1～2週間くらい設けた方がよいのでは。

14 もともとの家族との関係

関係性は決して良いとは言えないが、かといって特別悪いとも言えない中途半端な感じな気がする。中退の時にはもちろん親と話したが、親も自分も、話をする時には「出来るだけ早く終わらせる」というスタンスなので、相談というよりは報告に近い感じだった。中退に際しては、理由は聞かれたが強く反対されるようなことはなかった。

自分と親もそうだが、それより親同士の関係性が良くなかった。

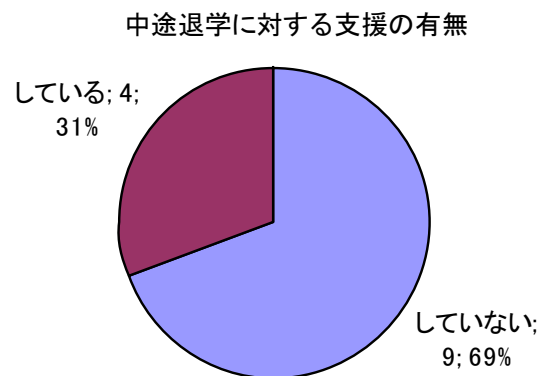
## 調査概要

|      |                               |
|------|-------------------------------|
| 実施機関 | 中途退学者の課題・支援検討委員会              |
| 調査期間 | 2012年8月～10月                   |
| 調査対象 | 栃木県に拠点置く支援団体                  |
| 抽出方法 | 栃木県が開催する「若者自立支援ネットワーク会議」の構成団体 |
| 調査方法 | 記入式                           |

## 【支援の状況】

### ■1 大学等高等教育機関を中途退学した若者のために特別な支援を実施の有無。

今回の調査にあたり、中途退学者の問題をテーマにしたアンケートに回答していただいた団体が13団体（24%）であった。このことから、若者自立支援を範疇におく団体であっても大学等の中途退学というテーマについては支援方法が確立していないことがうかがえる。なお、回答があった団体のうち、特別な支援をしているのは4団体であった。

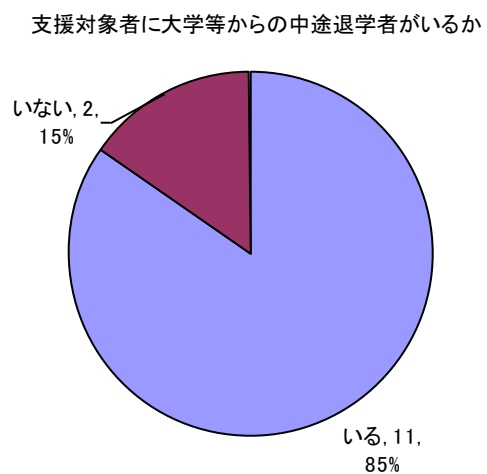


## ■ 2 中途退学者への支援の具体例

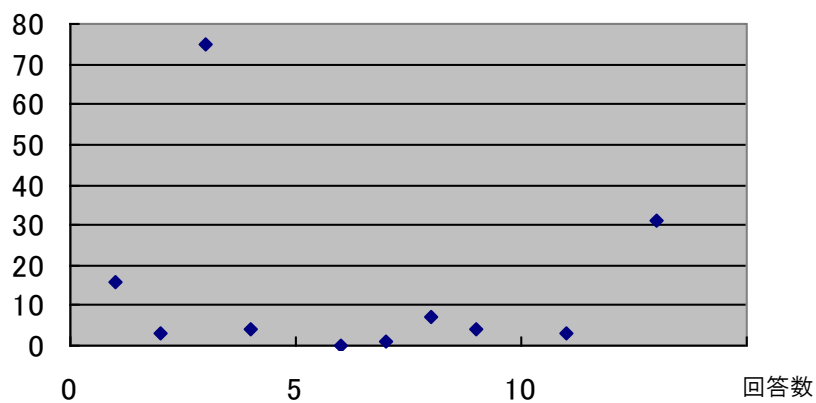
| 具 体 例  |
|--|
| 本人または保護者より問合せ、来所後、面談。状況によってグループプログラムへの参加を促す。 |
| うつ病を発症した方の相談・就労支援。                           |
| 生活体験、冒険教育、自然体験。                              |
| 中途退学者のための相談会を実施。                             |

## ■ 3 支援対象者に大学等からの中途退学者がいるか

支援団体において、支援している若者で大学等からの中途退学を経験している者の比率は85%と高く、自立に問題を抱えた層の中に中途退学経験者が一定割合いると考えられる。人数は団体規模、支援活動実施年数により大きくばらつく結果となった。

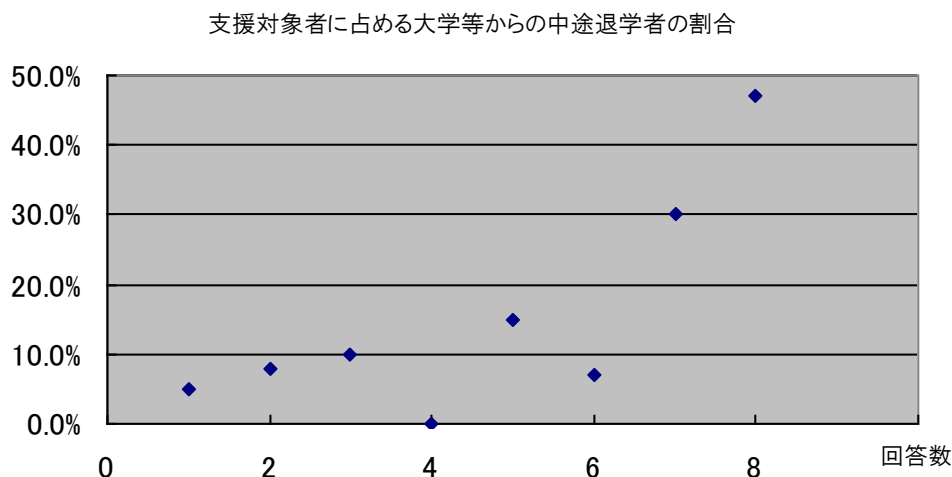


名 支援対象者のうち大学等からの中途退学者の数



#### ■ 4 支援対象者に占める大学等からの中途退学者の割合

大学等からの中途退学者がいると答えた 11 団体へ、支援対象者に占める大学等からの中途退学者の比率を尋ねたところその比率には大きなばらつきがあった。また、2 団体については詳細の把握はしていない状況であった。



#### ■ 5 中途退学者増加の理由

中途退学者増加の理由について、支援側の視点から自由に記載していただいた結果、目的の曖昧さ、コミュニケーションの弱さ、体験の低下をあげる内容が多く見られた。

| 中途退学者増加傾向の理由  |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会に出た際の評価が、学歴よりも個人の資質が大きく問われるというところをマスコミやネットでも取り上げる機会が増えてきて、なんとなく大学に進学した学生のモチベーションが下がり、学習意欲が下がり辞めてしまうのではと考える。</li> <li>・ コミュニケーション能力において変化があるように感じる。現在はコミュニケーションをしなくても生活する上での不便が減ってきているように、全体的に若年者のコミュニケーション能力が低下してきているのではと考える。それにより人間関係を構築する大学等のコミュニティからはじかれてしまうのだと思う。</li> </ul> |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 精神的に自立できていない若者が、無目的に大学へ進学するケースが増えている。その上、コミュニケーションを図ることに対して困難を抱えていれば、学業に意味も見出せないまま孤立せざるをえないと思う。</li> </ul>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 病気（精神）発病によるところが多い。</li> </ul>  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会体験不足による人間関係構築能力の低下</li> </ul>  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対人関係の未熟さ。自立の問題。生活管理。発達障害の問題。</li> </ul>  |

|   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション力、主体性の不足。</li> <li>・早期の安易な職業教育や現役合格志向によるミスマッチ。進学率が上がったことによって増えた低学力、低意欲者等のお客様感覚の学生に対する大学側の対応力（授業の内容教員の意識等）</li> </ul> |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・増加傾向の背景についてはありませんが、漠然とした進路選択、自己が確立していない、コミュニケーションが苦手、自尊感情が低く、常に他人との比較等。経済・生活環境。</li> </ul>                                    |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・あらゆる体験が不足している。</li> <li>・職員のスキルが固定化している。</li> </ul>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な要因が絡みあっていると思われる。</li> </ul>  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な支援機関の周知がされていないことや、大学教育機関との連携がまだ確立されていないからではないか。あともう一点は経済的な理由がある。</li> </ul>  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ぶことの必要性や、実用性もつとて言えば学ぶことが希望や明るい未来に繋がると感じられない。人間関係に関する不安、友だちができない孤立感。</li> </ul>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育制度の問題。集団の中での人間関係を構築する力が弱い。家族間の情緒的な関わりコミュニケーションが希薄。</li> </ul>   |

## 【調査票】

|  |    |   |    |   |
|--|----|---|----|---|
| 貴団体名   |    |   |    |   |
| 1. 貴団体の支援において大学等高等教育機関を中途退学した若者のために特別な支援を実施していますか。   |    |   |    |   |
| はい <span style="margin-left: 200px;">いいえ</span>  |    |   |    |   |
| 2. 「はい」とお答えいただいた団体について、具体例をお答えください。  |    |   |    |   |
| 3. 貴団体におかれまして、支援対象者である若者に大学等の中途退学者はいますか。   |    |   |    |   |
| いる <span style="margin-left: 100px;">いない</span> <span style="margin-left: 100px;">把握していない</span>             |    |   |    |   |
| 4. 「いる」とお答えいただいた団体について、中途退学者の実数及び比率をわかる範囲で結構ですでお答えください。  |    |   |    |   |
| <table style="border: none;"> <tr> <td>実数</td> <td>人</td> </tr> <tr> <td>比率</td> <td>%</td> </tr> </table>   | 実数 | 人 | 比率 | % |
| 実数   | 人  |   |    |   |
| 比率   | %  |   |    |   |
| 5. 現在、大学等の中途退学者が全国で約 10%であり、栃木県内大学においては概ね 14%（下野新聞調べ）で以前よりも増加傾向にあるといわれています。その背景に何か有ると感じますか、感じているところをご記入ください。 |    |   |    |   |

## 調査概要

- 実施機関 中途退学者の課題・支援検討委員会  
 調査期間 2012年8月～10月  
 調査対象 栃木県に拠点を置く大学・短期大学  
 調査方法 記入式  
 回答数 10校（12団体）  
 備考 大学内でも学部によって組織構成が大きく違う場合には1団体とした  
 その結果、返答のあった大学数は10であったが回答数としては12となっている。

## 【大学の状況】

### ■1 中途退学に関する担当部署

各大学によって、部署名に違いがあるものの、多くの大学で学務、教務部門が担当し、特別な部署を設けているところはなく、既存の部署で対応している状況であった。

### ■2 中途退学に関する手続き

大学中退の手続きは、いくつものゲートを設けている大学が多く、最も多い大学では手続き上6行程を経ないと退学手続きが終了しないようになっている。特に、担任・指導教官など教官と接触する機会を設けている大学が8大学、面談・聞き取りの機会を設けている大学が5大学であった。また、保護者の連名や捺印が必要な大学は11あり、記載がないのは1大学のみであった。

|   |   |
|---|---|
| A | 「退学届」を提出、保証人(父母)の同意を確認（印鑑）。   |
| B | ①退学を希望する学生は、担当課の窓口に申し出る。<br>②窓口担当者（看護師）は退学の理由を聞きクラス担任もしくは最終学年であれば卒業研究で所属している研究室教員と、退学のための面談。<br>③面談後、退学もやむなしとなった場合、担当課窓口に再来させ本人に退学願書を渡す。<br>④退学願書は、退学の理由等を明記し本人及び保護者の自署・押印をもらって提出。<br>⑤退学願書には担任及び研究室教員の退学面談の内容及び所見・退学経過書・身上書・成績を添付し、担任者欄に押印後、担当課より学籍担当者に提出。<br>⑥最終的な決裁後、退学許可通知書を保護者及び本人に郵送。 |
| C | チュータ担当やゼミ担当教官と面談の上退学届を渡す。学生本人の印鑑のほかに保護者印および承諾所見を記入する欄あり。  |



|   |  |
|---|--|
| D | 担任教官との面談を経て担当課から手続き書類を渡す。書類には本人と保護者の署名・捺印を施したものを提出。<br>教授会の承認を経て「退学許可書」を家庭に送付。   |
| E | 担当課に退学届が提出された場合、本人が所属する専攻教員と面談。退学届に本人と保護者の署名、押印が必要。  |
| F | クラス担任に相談後、退学届を提出させ（本人、保証人の署名捺印）理由を詳細に書くように指導。学長決裁のためクラス担任が指導措置を作成し、決裁後許可書を送付。  |
| G | 本人及び保護者から事情の聞き取り、その上で病気やその他やむをえない事由により退学しようとする場合は、事由を詳記した退学届を提出、学長の許可を受ける。退学届には本人及び保証人のサインと印鑑を要する。病気の場合は医師の診断書を要する。                          |
| H | 本人及び保証人の氏名の記入及び捺印された「退学届」を担当課が受理。教務委員会、教授会及び教授総会受諾後学長まで決裁を取る。決済後本人・保護者宛「退学許可書」を発行送付。   |
| I | ①退学希望者が担当課に「退学願」の様式を取りにくる。<br>②退学希望者が保証人、所属学部の学科長及び指導教官から直接承認印をもらう。<br>③担当課への退学願を提出する。<br>④所属学部の学科等会議及び教授会に諮る。<br>⑤会議で承認後担当課にて決裁後退学許可証を発行する。 |
| J | 担任の先生から退学に伴う「意見書 - 退学までの状況・指導の経緯」を提出。学生からは保証人連署の上、理由の記載された「退学願」を提出。教授会承認決裁の上退学許可となる。   |
| K | 退学を希望する場合は担当課より退学願を受け取り、本人の署名・捺印及び保証人の署名・捺印をし、退学月日と事由を記入の上担当課に提出。  |
| L | 退学を願い出る際に学年担当を経由して提出する。退学の理由が「疾病」の場合は医師の診断書を添付する。  |

### ■ 3 退学が予想される学生の把握方法

退学の予防という視点では多くの大学が出席管理や成績管理によりチェックしていて、8 大学であった。「情報共有につとめている」「履修登録時に個別の指導」「各種委員会・部会で情報共有」「学生担当が把握可能であれば面談」といった出欠や成績以外の方法で本人状況を把握している例も見られた。その一方で、相談を受けたときや、手続きの中で把握する程度の大学も数校あった。学校間での温度差が見られた。

|   |   |
|---|---|
| A | 欠席が続いた学生を担当課に報告→他の教科の様子も含めて担任に報告→担任から学生に連絡                              |
| B | 窓口担当者とのミーティングにより、成績不振者、発達障害に近い学生等、窓口対応の際、“？”と感じた学生の情報を共有することで把握につとめている。 |
| C | 授業への出席状況や単位取得状況及び日常会話の中から判断。  |

|   |  |
|---|--|
| D | 履修未登録者への連絡。担任教官からの連絡（基礎ゼミ等必修授業の欠席状況や相談など）<br>キャンパスライフ支援室からの連絡、成績不良学生の面談                      |
| E | 授業に出席しない。定期試験を受験しない等成績不振。留年生。  |
| F | 担任が学生状況を把握できるように履修登録時は個別の指導並びに出席管理システムによる出席状況の確認を行い個別に指導を行っている。年2回の教育相談会でも保護者と面談指導を行っている。    |
| G | 成績・出席状況による把握。成績不振の学生は個別に呼び出し事情を聴きとる。また成績・学生生活面で問題があると思われる学生については各種委員会・部会で情報交換を行い早期の把握に努めている。 |
| H | 学年担当が把握可能な状態であれば直接本人と面談を実施し状況を把握する。  |
| I | 本人、保護者または指導教員から連絡・相談を受けた時  |
| J | 担任の先生を通して都度報告される。  |
| K | 学業成績及び授業の出席状況  |
| L | 担任との面談   |

#### ■ 4 退学を予想される学生に対する支援の内容

退学を予防するための支援として、学費免除などの経済面での項目を挙げた大学が2校、相談対応を挙げている大学が8校、学習支援を挙げた大学が3校であった。

|   |  |
|---|--|
| A | 学生相談室(週14名の教職員が対応)・学生支援室・オフィスアワー等学生が気軽に話に行ける環境作りに心がけている。   |
| B | ①成績が問題の場合…学習支援室での基礎的な学習、各教科教員のアドバイス<br>②経済的な問題の場合…奨学金の案内、学納金納入の延長・分割の手続き等<br>③学生生活全般…クラス担任、学生相談室での対応<br>④健康問題…看護師によるアドバイスや医療機関の紹介                              |
| C | 担当教官やその他教職員が個別相談に応じる。  |
| D | 特になし。  |
| E | 長期授業欠席者には連絡をしている。応答がない場合は、保護者・郵便・メールで連絡をとるようにして、本人と面談するようにしている。  |
| F | 学習支援室での個別指導による学力の向上、学内カウンセラーによる心のケア、延納手続きによる学費納入期間の延長等で実績を上げている。問題の学生を学内システムで共有・指導している。  |
| G | 学習面での問題であれば学習支援部会で、個別に担当教官をつけて補習を行っている。その際には心理面や生活面での相談にも関わっている。心理面や生活面での問題であれば学生生活支援センターで支援を行っている。また、各種委員会・部会を定期的開催して情報を共有するとともに、支援の充実を図っている。学生同士の支援の場も設けている。 |
| H | 学生担当アドバイザー制を採用し、学生からの相談を受けるとともに科目責任者からの欠席の多い学生情報等を受けて該当学生と面談し、退学につながらないような支援を行っている。  |

|   |  |
|---|--|
|   | る。1年次前期よりゼミ形式の少人数教育を段階的に導入し学生と教員の密な関係性の構築を目指すことかつ大学生らしい自主的な学習方法の指導を行うことで学業不振による退学を予防するように対応している。                                   |
| I | 指導教員による直接指導。経済的支援…授業料の免除及び徴収猶予、各種奨学金、学生寮の案内。学生相談窓口…健康メンタルヘルスの専門家の常駐、セクハラ・アカハラ等の相談窓口を設けている。キャリア教育・就職支援窓口では進路相談の専門家が毎日対応できる体制になっている。 |
| J | 特になし。  |
| K | 学年担任による面接カウンセリングルームの利用。  |
| L | 特になし。  |

## ■ 5 実施している支援の内容

実施している支援としては、本人との面談による状況把握及び保護者への面談が行われている。しかし、半数の6大学においては「特になし」「なし」「無回答」であった。

|   |   |
|---|---|
| A | 年2回 個人面談を担当中心に実施(勉学の状況・進路等について把握するようにしている)。                             |
| B | 面談によるフォローの実施。追跡調査はしていない。  |
| C | なし。   |
| D | オフィスアワー、担当教官による声掛けと面談、学生アンケート、基礎ゼミ演習での教員による時間割チェック、保護者と教員の面談。           |
| E | 無回答   |
| F | 退学に至る過程でクラス担任が中心となって支援を行っている具体的な理由により4つの支援内容についてその部署と連絡を取って支援。          |
| G | 特になし  |
| H | 退学の希望のある学生に対しては学年担当アドバイザーが面談し必要時には保護者への面談も実施し退学への意思を確認した上での退学届提出となっている。 |
| I | 特になし。   |
| J | 特になし。   |
| K | 特になし。   |
| L | 特になし。   |

■ 6 今後実施を予定している支援

今後について、新たな支援を検討しているところが1校、他は特になし。

|   |   |
|---|---|
| A | どうしても対応が遅れてしまうので教員と教学部の連絡を密にして、早めに声掛けが必要と考える。 |
| B | これまでとかわらない。                                   |
| C | 特になし。   |
| D | 現在支援方法を検討中。                                   |
| E | 無回答   |
| F | 特になし。   |
| G | 特になし。   |
| H | 特になし。   |
| I | 特になし。   |
| J | 特になし。   |
| K | 特になし。   |
| L | 特になし。   |

■ 7 防止、支援対策の困難な点

中途退学の問題の困難さについては、経済的な問題について対応が不可能または限界があるとした大学が3校、人員確保の難しさをあげた大学が2校、そのほか本人が支援を活用しないことや病気、本人のモチベーションなどがあげられた。

|   |   |
|---|---|
| A | うつ病等、病気治療が必要な学生も毎年数名いる。心理学担当の教員が定期的に話を聞いている。  |
| B | 大学として退学を予防するための支援をしているが、本人が活用するかどうかによる。大学が〇〇してくれない、と耳にすることが多いが、本人が動き出さないことには大学での支援は難しい。当人を動かすための支援は、大学で行う支援の範疇ではないと考える。 |
| C | 経済的理由で家庭の事情による退学の場合は対応がほぼ不可能。   |
| D | 不登校等により連絡がつきにくいこと。経済的な事情により進路変更する場合。  |
| E | 無回答   |
| F | 経済的事情については、①奨学金、②本学独自の奨学金、③納入時期の延長や分割払い、④金融機関による貸付け等で対応している。経済的理由がアルバイトによる勉強不足を招き成績不振による退学にもつながっており大きな問題となっている。         |
| G | マンパワー不足。学生の視点に立っての支援  |
| H | 特になし。   |
| I | 人員の確保が容易ではない。対応職員の専門性の不足。   |
| J | 中途退学理由にもよるが個人的な問題であり困難。   |
| K | 学生の将来に対するモチベーションの持続。  |
| L | 特になし。   |

■8 中途退学者が増加している状況の背景は何か。

背景として、景気などの経済的要因をあげた大学は 5 校、学生の学力不足をあげた大学が 4 校、目的の曖昧さや人間関係の不安定さをあげた大学がそれぞれ 3 校だった。

|   |   |
|---|---|
| A | 中学高校時代から他者と接するのが苦手で、教室に入れない友人が作れない学生が増えている。   |
| B | 基礎学力の不足。大学に対する情報不足(大学は何を学ぶところか?高校とどう違うか?など)・大学進学を安易に考えている。進学率は高くなっても、少子化は進んでおり、入学者の減少は避けられない。大学としても経営上の問題もあり多くの学生が入学できる方策を講じることになる。 |
| C | 景気の悪化、大学全入時代による低学力化。  |
| D | 経済的困難、目的のない大学進学。  |
| E | 無回答   |
| F | 経済的理由がアルバイトによる勉強不足を招き成績不振による退学にもつながっており大きな問題となっている。   |
| G | 不本意な入学や関心の移行による学習意欲の低下。生活面では、友人ができない等の人間関係。学習面では学習の躓きや基礎の学力不足による学業不振。   |
| H | 大学全入時代となり、以前より丁寧な学習指導が必要となっているが一般的に大学教員側がそれに適応した教育改革を実践できないこと。  |
| I | 社会全体の経済的停滞。個人の精神的不安の増大。   |
| J | 景気低迷等による金銭的理由。  |
| K | 卒業後の目標があやふやなため無気力となり、中途退学になることが考えられます。しかし本学に入学する者は医師を目指しており、目的が明確であるため退学者は他の学部と比較すると少ない状況であると考えます。                                  |
| L | 特になし。   |

■9 大学退学後に発生している、また発生が予想される問題は何か。

予想される問題としては、6 校がニート・ひきこもりなど社会的孤立状態に陥ると予想している。また、就職が困難な事を問題としてあげた大学は 3 校、次の進路が決まりにくいとした大学が 3 校であった。

|   |   |
|---|---|
| A | 経済的理由での相談に対しては延納などできる限り配慮している。進路変更(4年大学への再受験)など、退学後の目的がはっきりしている学生はしかたないが、学業についていけない学生には、個別の指導が必要と考え進めている。 |
| B | 正社員としての就職が困難になり、ニート予備軍となりやすい。将来安定した経済状況にならない可能性が高い。   |
| C | ニートや引きこもりの若者が増加すること。  |

|   |   |
|---|---|
| D | 就職困難と高卒による給与減。  |
| E | 無回答   |
| F | 退学後の追跡調査を行っていないため、特に問題は生じてない。   |
| G | 少数と思われるが、学校に行かない・仕事に就かないといった「ひきこもり」となるケースが考えられる。                            |
| H | 社会的トレーニングを受けないままで社会に出ていくきっかけを失いやすく、フリーターやひきこもりが発生すること。                      |
| I | 本人の意に沿わない退学（経済的理由）の場合挫折感による社会的孤立やひきこもりが予想される。退学学生が適切な進路を見つけることが困難であると予想される。 |
| J | 特になし。   |
| K | 退学後の新たな進路が早期に決定しないと、孤立化を招きひきこもりが懸念されます。                                     |
| L | 特になし。   |

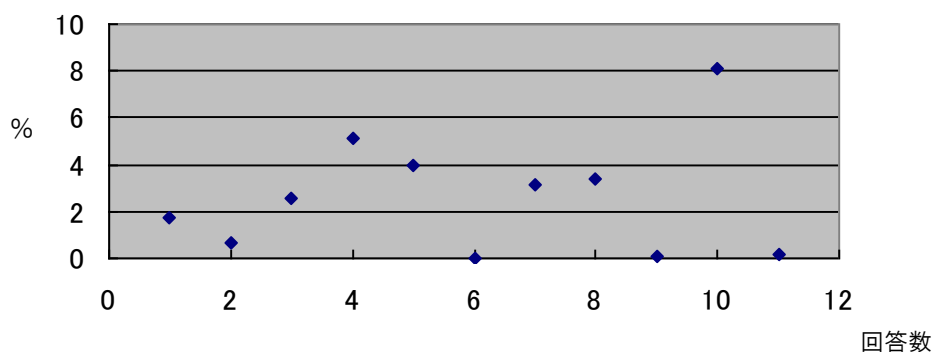
■10 外部団体との連携を取っているか。

外部団体との連携を図り、中途退学の問題に取り組む大学は皆無であった。ただし1校のみが、病気による退学については連携をしていた。

■11 昨年度（平成23年度）の中途退学者数及び比率をお教えてください。

中退率には全体的にはばらつきがある、中退率というのは1年間に中退する％であり。今回の調査の平均は2.6％。この場合4年間で在籍率が90.9％中退率は10.0％になる。今回のデータで極端に中退率の低い2校については、いずれも医療系であり、この数値が全体を押し下げている。医療系を省いた場合3.2％で4年間で在籍率が87.8％となり中退率が12.2％となる。

中途退学率



(このグラフの数値については上記のA-Lの順ではありません。)

※中退率の計算方法（日本中退研究所「中退白書 2010」に準ず）

1年目在籍者 100% 3.2%が中退  $100 - 3.2 = 96.8$   
→2年目在籍者 96.8% 3.2%が中退  $96.8 - (96.8 \times 0.032) = 93.7$   
→3年目在籍者 93.7% 3.2%が中退  $93.7 - (93.7 \times 0.032) = 90.7$   
→4年目在籍者 90.7% 3.2%が中退  $90.7 - (90.7 \times 0.032) = 87.8$   
→卒業時在籍者 87.8%  
よって 中退率は  $100\% - 87.8\% = 12.2\%$

### 【調査票】

|  |
|--|
| 1. 中途退学に関する担当部署名をお教えてください。   |
| 2. 学生が退学を希望する場合、どのような手続きをとられていますか。   |
| 3. 退学を予想される学生の把握方法をお教えてください。   |
| 4. 退学を予想される学生に対する支援の内容をお教えてください。また、特に実績をあげているものについてはその旨ご記入ください。  |
| 5. 退学にあたって実施している支援の内容を具体的にお教えてください。また、特に実績をあげている者についてはその旨ご記入ください。  |
| 6. 今後退学者に対して実施を予定している支援がありましたら、その内容をお教えてください。  |
| 7. 中途退学に関する防止、支援対策について、どんな点が困難だと思いますか。自由にご意見をお聞かせください。   |
| 8. 現在、大学等の中途退学者は全国で約10%栃木県内大学においては概ね14%(下野新聞調べ)と言われています。以前よりも中途退学者が増加している状況が見られますが、その背景には何があると感じますか。自由にご意見をお聞かせください。 |
| 9. 大学退学後に発生している、また発生が予想される問題は何だとお考えですか。自由にお聞かせください。  |
| 10. 中途退学に関して外部団体との連携を取っていますか。取っている場合はその連絡先、連携内容について教えてください。  |
| 11. 最後に、貴大学及び短期大学における昨年度の中途退学者数及び比率をお教えてください。  |

## 行政(県)の対応状況

県では、下記の相談窓口を設置し、中退者を含む県民からの相談に対応している。(平成25年2月末日現在)

### 1 精神的な悩みや病気、対人関係や性格上の悩み、ひきこもりなどに対する相談

| 相談窓口名                         | 窓口種別 | 対象地域                            | 受付時間                                  | 連絡先等  |
|-------------------------------|------|---------------------------------|---------------------------------------|---|
| こころのダイヤル（県精神保健福祉センター）         | 電話   | 県内全域                            | 月曜～金曜<br>9時～17時<br>（祝日・年末年始を除く）       | TEL028-673-8341（月曜午前以外）<br>※毎週月曜(祝日除く)の9時～12時はフリーダイヤル<br>TEL 0120-302-362 |
| 県精神保健福祉センター                   | 電話面接 | 県内全域                            | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒329-1104<br>宇都宮市下岡本町<br>2145-13<br>TEL 028-673-8785                      |
| 県西健康福祉センター健康支援課<br>（精神保健福祉相談） | 電話面接 | 鹿沼市                             | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒322-0068<br>鹿沼市今宮町 1664-1<br>TEL 0289-62-6224                            |
| 県東健康福祉センター健康支援課<br>（精神保健福祉相談） | 電話面接 | 真岡市<br>益子町<br>茂木町<br>市貝町<br>芳賀町 | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒321-4305<br>真岡市荒町 2-15-10<br>TEL 0285-82-2138                            |
| 県南健康福祉センター健康支援課<br>（精神保健福祉相談） | 電話面接 | 小山市<br>下野市<br>上三川町<br>野木町       | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒323-0811<br>小山市犬塚 3-1-1<br>TEL 0285-22-6192                              |
| 県北健康福祉センター健康支援課<br>（精神保健福祉相談） | 電話面接 | 大田原市<br>那須塩原市<br>那須町            | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒324-8585<br>大田原市住吉 2-14-9<br>TEL 0287-22-2259                            |



| 相談窓口名                             | 窓口種別     | 対象地域                       | 受付時間                                  | 連絡先等   |
|-----------------------------------|----------|----------------------------|---------------------------------------|--|
| 安足健康福祉センター<br>健康支援課<br>(精神保健福祉相談) | 電話<br>面接 | 足利市<br>佐野市                 | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>(祝日・年末年始を除く) | 〒326-0032<br>足利市真砂町1-1<br>TEL 0284-41-5895         |
| 今市健康福祉センター<br>保健衛生課<br>(精神保健福祉相談) | 電話<br>面接 | 日光市                        | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>(祝日・年末年始を除く) | 〒321-1263<br>日光市瀬川51-8<br>TEL 0288-21-1066         |
| 栃木健康福祉センター<br>保健衛生課<br>(精神保健福祉相談) | 電話<br>面接 | 栃木市<br>壬生町<br>岩舟町          | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>(祝日・年末年始を除く) | 〒328-8504<br>栃木市神田町6-6<br>TEL 0282-22-4121         |
| 矢板健康福祉センター<br>保健衛生課<br>(精神保健福祉相談) | 電話<br>面接 | 矢板市<br>さくら市<br>塩谷町<br>高根沢町 | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>(祝日・年末年始を除く) | 〒329-2164<br>矢板市本町2-25<br>TEL 0287-44-1297         |
| 烏山健康福祉センター<br>保健衛生課<br>(精神保健福祉相談) | 電話<br>面接 | 那須烏山市<br>那珂川町              | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>(祝日・年末年始を除く) | 〒321-0621<br>那須烏山市中央<br>1-6-92<br>TEL 0287-82-2231 |

## 2 就職に関する悩みや不安に対する相談

| 相談窓口名     | 窓口種別            | 対象地域 | 受付時間   | 連絡先等  |
|-----------|-----------------|------|--|---|
| とちぎジョブモール | 電話<br>メール<br>面接 | 県内全域 | 月曜～金曜<br>8時30分～19時<br>土曜10時～17時<br>(祝日・年末年始を除く)<br>※メールは毎日24時間受付 | 〒321-0964<br>宇都宮市駅前通り<br>1-3-1 フミックスSTM<br>ビル1階<br>TEL 028-623-3226<br>メール tochigi-shushoku1<br>@sirius.ocn.ne.jp |

### 3 生活保護に関する相談

| 相談窓口名                 | 窓口種別 | 対象地域                       | 受付時間                                  | 連絡先等   |
|-----------------------|------|----------------------------|---------------------------------------|--|
| 芳賀福祉事務所（県東健康福祉センター内）  | 電話面接 | 益子町<br>茂木町<br>市貝町<br>芳賀町   | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒321-4305<br>真岡市荒町 2-15-10<br>TEL 0285-82-2138     |
| 下都賀福祉事務所（県南健康福祉センター内） | 電話面接 | 上三川町<br>壬生町<br>野木町<br>岩舟町  | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒323-0811<br>小山市犬塚 3-1-1<br>TEL 0285-21-2216       |
| 那須福祉事務所（県北健康福祉センター内）  | 電話面接 | 塩谷町<br>高根沢町<br>那須町<br>那珂川町 | 月曜～金曜<br>8時30分～17時15分<br>（祝日・年末年始を除く） | 〒324-8585<br>大田原市住吉町<br>2-14-9<br>TEL 0287-23-2172 |

※各市の生活保護に関する相談は、下記の福祉事務所（設置主体：市）で受け付けています。

| 福祉事務所等名     | 所在地                      | 代表電話番号                       |
|-------------|--------------------------|------------------------------|
| 宇都宮市社会福祉事務所 | 〒320-8540 宇都宮市旭 1-1-5    | 028-632-2105<br>028-632-2468 |
| 足利市福祉事務所    | 〒326-8601 足利市本城 3-2145   | 0284-20-2133                 |
| 栃木市福祉事務所    | 〒328-8686 栃木市入舟町 7-26    | 0282-21-2516                 |
| 佐野市福祉事務所    | 〒327-0831 佐野市浅沼町 798     | 0283-20-3020                 |
| 鹿沼市福祉事務所    | 〒322-8601 鹿沼市今宮町 1688-1  | 0289-63-2173                 |
| 日光市福祉事務所    | 〒321-1292 日光市今市本町 1      | 0288-21-5149                 |
| 小山市福祉事務所    | 〒323-8686 小山市中央町 1-1-1   | 0285-22-9622                 |
| 真岡市福祉事務所    | 〒321-4395 真岡市荒町 5191     | 0285-83-6063                 |
| 大田原市福祉事務所   | 〒324-8641 大田原市本町 1-3-1   | 0287-23-8637                 |
| 矢板市福祉事務所    | 〒329-2192 矢板市本町 5-4      | 0287-43-1116                 |
| 那須塩原市福祉事務所  | 〒325-8501 那須塩原市共墾社 108-2 | 0287-62-7136                 |
| さくら市福祉事務所   | 〒329-1392 さくら市氏家 2771    | 028-681-1115                 |
| 那須烏山市福祉事務所  | 〒321-0526 那須烏山市田野倉 85-1  | 0287-88-7115                 |
| 下野市福祉事務所    | 〒329-0594 下野市石橋 552-4    | 0285-52-1112                 |

## 第2部

# 大学及び短大からの中途退学における 課題と支援について

山本 繁（NPO 法人 NEWVERY 理事長、日本中退予防研究所所長）

### 1. 「中退」とは何か？

まず、大学中退の理由を概説したい。

受験生から入学者を選抜し、カリキュラムや新たな学習・生活環境に吸収していく際、上手く吸収できない、不適応を発生させる学生が存在する。また、カリキュラムにいったん吸収できても、今度はカリキュラムを駆け上がっていく際に、そこから逸脱し、ドロップアウトしていく学生が存在する。「不適応」と「逸脱」が中退の主な理由である。次に対策である。

前者のような学生に対しては、より多くの学生をカリキュラムや新しい大学の環境に吸収できるように、そのデザイン、人の配置等を工夫・改善することで中退を未然に防ぐことが可能である。また、タイミングよく学生支援の手が行き届き、中退までにカリキュラムに適應できない要因を取り除くことができれば、中退する学生を減らすことができる。

後者のような学生は、多くの場合、カリキュラムを駆け上がられていない、あまり単位を取れていない、カタチ上は単位を取得できていても学びが形骸化していて、成長を実感できていないケースがほとんどである。このような場合、カリキュラムを工夫するとともに、カリキュラムを駆け上がっていく学生に伴走する教員の教授法や支援法の開発が必要になる。しかし、それでもカリキュラムから逸脱する学生は必ず発生するのであり、そのような学生をいかに早期発見し支援するのか、ということが退学抑制の要諦である。

なお、単位の取得状況から見れば、前者は入学当初から低単位であるケースが多く、後者は1年後期以降に失速し低単位になるか、取得単位数では問題は現れず、ある日突然退学を申し出る。

ここまでの意見をまとめると

- ①アドミッションポリシーとカリキュラムポリシーの接続
- ②カリキュラムポリシーの実現度（カリキュラムポリシーと実際のカリキュラムをかい離させないこと）、および学生の興味・関心・学力・ソーシャルスキル等とのマッチング
- ③教職員の教授法・支援法の開発
- ④修学支援における早期発見・早期支援  
が中退を防ぐポイントになる。

また、個々の大学・学部・学科により、優先的に取り組むべき課題は異なる。入学する学生、教育内容や現状の取り組みが大学・学部ごとに異なるからである。例えばある中堅私大の各学部の主要な中退理由は以下の通りである。

- ①文学部：歴史・文学への興味・関心が湧かない、怠学
- ②法学部：法学・政治学への興味・関心が湧かない、怠学
- ③経営学部：怠学、ソーシャルスキル不足（友人ができない、一人暮らしが出来ずに

昼夜逆転してしまったなど)

④経済学部：基礎学力不足（特に数学）、経済学への興味・関心が湧かない、ソーシャルスキル不足（同上）

⑤理系全般：基礎学力不足（特に物理・化学）、ソーシャルスキル不足（同上）

「怠学」は、大学が学生にかかる教育負荷が軽すぎるケースで良く見られる現象である。学生が緊張感や集中力を失い、徐々に生活が怠惰になっていく。もう少し柔らかい言い方をすれば、大学がラクすぎてやる気をなくしまった、墮落してしまった、といったところであろうか。

## 2. 中退理由の類型化

日本中退予防研究所では、学生の中退理由を以下の3類型に分類している。

①学生と、大学が提供している教育内容・教育方法とのミスマッチ

②個々の学生が抱える課題や事情

③キャリア不安・将来不安と大学卒業価値の低下

以下に、その背景と対策を見ていく。

教育内容・教育方法とのミスマッチが起きている背景には「学生の多様化」がある。学生の興味・関心、生育・学習歴、アカデミックスキル・ラーニングスタイル等が以前に増して多様化し、従来のカリキュラムや教授法で吸収できない学生が増加しているのかもしれない。対策のポイントは、まず「学生理解」を深めることであり、従来とは違った学生たちを深く理解し、学生の変化に対する柔軟かつ迅速な対応をすることである。

個々の学生が抱える課題や事情の背景は、ソーシャルスキルの低下、発達障害、経済的困窮などによる。コミュニケーション能力が低く学内で孤立する学生、逆に人間関係で問題を起こす学生、また、一人暮らしができずに昼夜逆転した生活から抜け出せない学生などがこのパターンに該当する。経済的理由による中退は、全中退者の10%程度ではないかというのが日本中退予防研究所のこれまでの活動による見解である。対策上のポイントは、大学の「課題解決能力」の強化であり、問題発見・問題解決のスピード・精度を向上させ、いかに早期発見・早期支援を実現するかということである。また、学内のコミュニケーションデザインを再構築することによって問題を未然に防ぐことも一部可能である。クラス制の導入などはそのツールとなる。一方、昼夜逆転は学生本人による自力での解決は意外と難しく、問題発生後、学生寮等への転居を勧める方が現実的である。

近年増加傾向なのがキャリア不安・将来不安と大学卒業価値の低下である。主な背景は、就職氷河期、グローバル化、新卒一括採用・終身雇用の終焉、女性の社会進出、少子高齢化と社会保障不安などがある。対策上のポイントは、親世代のキャリア観からの脱却を促すキャリア教育、キャリアデザイン力の強化、キャリア形成の機会提供、卒後も含めたキャリア支援の強化等である。

ただ、この3類型のどれか一つで中退するというわけではなく、多くの場合、主因はあるものの「複合的」である。かといって、全ての要因を取り除かなければ中退防止できないというわけでもなく、主因を取り除くことで、中退防止は可能なケースがほとんどである。

### 3. 学生の中退防止

それでは、どのようにすれば学生の中退防止は可能になるだろうか。

私たちの活動では、まず、個々の大学・学部・学科で中退の要因となっている課題をできるだけ正確に把握しようと努める。教学面での IR (Institutional Research) はそのための手法の一つだが、そうすることで課題と対策のマッチング精度が向上し、より手ごたえのある取り組みにすることができるようになる。逆の言い方をすれば、それぞれの大学・学部・学科の入学者やカリキュラムや各種環境、学生支援の取り組み、教員の教授力・支援力、教育目標が異なるため、退学の要因となっている課題も様々である。他大学を真似するのではなく、その組織の課題に合った対策を講じることが重要である。

また、教学面でのさまざまなエビデンスが揃うことで、多くのステークホルダーの「納得感」を引き出すことが可能になる。「納得感」は直接民主主義が強く働く大学組織が対策を実行に移す上でとても重要な要素だと感じている。「課題に合った対策」を講じることができないケースでは、その対策を実行するための学内コンセンサスが取れなかったため、仕方なく善後策を講じている、という場面が見られる。

以上の2つが、学生の中退防止が成功しない時の最大の課題ではないだろうか。

### 1. 中退問題の所在

本稿では、大学中途退学問題について、できる限り実証データに基づいてその課題を検討し、対応の在り方を考えたい。

どのくらいの学生が大学を中途退学しているのか、その数は毎年公表されているわけではない。文部科学省が公表している数字としては、2008年3月末および2009年3月末時点の大学、短大および高専を合わせた中退者数があり、2008年は63,421人、2009年は49,394人であった(中央教育審議会 2011)。このうち4年制大学の学生が何人かは示されていないが、入学者数から所定年限後の卒業者数を引いたものを中退者とみなすという大雑把な推計で、学校種別の中退者の内訳を推測すると、4年制大学の学生はおよそ85%程度を占める。すると、数にして4万人から5万人強ということになる。

また傾向的な推移をこの大まかな方法によって推計すると、1990年代はおよそ入学者の2~5%程度であったが、近年では8~10%になっていた。大学中退者が増加傾向にあることは明らかである。

大学を卒業前に辞めるということが、なぜ問題なのか。経済界やマスコミ、芸能界には大学中退学歴の有名人が少なからずいるし、中途退学をむしろ意味のない大学生活からの離脱と評価する人もいる。中退が問題になるかどうかは、退学後、どういう状況になり、その後どのようなキャリアを歩んでいるか、本人がそれをどう受け止めているかにかかっているといえる。

そこで、学校を離れてから一定期間たった人たちに対する振り返り型の調査から、中退経験のある人とない人を比べることで、中途退学が問題になる場合を考えることにする。ここでは主に、労働政策研究・研修機構による調査(以下 JILPT 調査と呼ぶ: 調査は、東京に住む若者を対象に2011年に実施された。対象は学生と専業主婦を除く20~39歳で、20歳代調査と30歳代調査に別れる。エリアサンプリング法によりそれぞれ約2000票を回収している)の結果を用いるが、今回実施された「中途退学者の課題・支援検討委員会」調査(以下、委員会調査と呼ぶ)も一部参照する。なお、JILPT 調査では、大学中退者は「高等教育中退者」としてまとめられており、大学・短大・高専の中退者のほか、専門学校の中退者も含んでいる。

### 2. 中途退学直後の状況

まず、学校を離れた直後の状況から検討しよう。表1は20歳代調査の結果である。離学(卒業または中退で学校を離れること)直後は、高校中退者を含め、中途退学者の場合は、卒業者に比べて正社員の仕事に就いた者は少なく、アルバイト・パートや失業・無業の状態の人が多い。

新規学卒採用の慣行が根強い日本では、卒業という形で学校を離れないと、正社員としての就職機会は限られる。新卒としての応募なら就業経験を問われることはないが、

中途採用であれば、採用側は応募者のこれまでの経歴から職業能力を測ろうとする。就業経験がないことが、中途採用の市場ではマイナスとなり、正社員の職は得にくい。「委員会調査」でも、中退者は就職活動において「自分に強みがない」など困難を感じていることが指摘されている。「学校を卒業して就職する」という社会通念が、これをはじめとした若者たちを困惑させている。

表1 都内在住の若者の離学直後の状況（20～29歳、学生と専業主婦を除く）

|    |           | 正社員(公務含む) | アルバイト・パート | 契約・派遣等 | 自営・家業 | 失業・無職 | その他・無回答 | 合計    | N     |
|----|-----------|-----------|-----------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|
| 男性 | 高卒        | 46.6      | 34.7      | 4.1    | 3.2   | 9.1   | 2.3     | 100.0 | 219   |
|    | 専門・短大・高専卒 | 66.1      | 16.3      | 8.6    | 1.7   | 6.4   | 0.9     | 100.0 | 233   |
|    | 大学・大学院卒   | 78.1      | 7.5       | 4.7    | 2.1   | 6.5   | 1.2     | 100.0 | 429   |
|    | 中卒・高校中退   | 10.7      | 46.4      | 5.4    | 5.4   | 32.1  | 0.0     | 100.0 | 56    |
|    | 高等教育中退    | 9.5       | 63.5      | 9.5    | 2.7   | 10.8  | 4.1     | 100.0 | 74    |
|    | 男性計       | 59.2      | 21.7      | 5.8    | 2.4   | 8.8   | 2.0     | 100.0 | 1,030 |
| 女性 | 高卒        | 43.2      | 36.4      | 9.3    | 4.3   | 4.3   | 2.5     | 100.0 | 162   |
|    | 専門・短大・高専卒 | 58.5      | 20.4      | 12.9   | 0.6   | 5.6   | 2.0     | 100.0 | 357   |
|    | 大学・大学院卒   | 74.3      | 7.9       | 9.8    | 1.2   | 5.8   | 1.0     | 100.0 | 417   |
|    | 中卒・高校中退   | 2.9       | 70.6      | 0.0    | 5.9   | 20.6  | 0.0     | 100.0 | 34    |
|    | 高等教育中退    | 4.3       | 58.7      | 8.7    | 6.5   | 21.7  | 0.0     | 100.0 | 46    |
|    | 女性計       | 58.1      | 21.3      | 10.4   | 1.8   | 6.6   | 1.8     | 100.0 | 1,028 |

出所：JILPT(2012)

### 3. 20歳代、30歳代の中退経験者のキャリア

では、学校を離れてから時間がたてばどうなのか。中退後、他の学校に入りなおすようなケースもあると思われるが、JILPT調査では、最終学歴が学校中退の場合だけが区別でき、大学などに再入学して卒業資格を得た場合は中退者には含まれていない。この点は留意が必要である。

図1は、性別・学歴別に、20歳代と30歳代男女の離学から調査時点までの職業キャリアを類型化して、その類型別の比率を見たものである。職業キャリアの類型は、ここでは次の3つについて示している（この3つその他、離学直後は正社員だが後に非正社員に変わるなどの異なるキャリア類型があるが、ここでは掲載を省いている）。

- ①正社員定着・転職：新規学卒で正社員として就職して、定着している、または、就職後に正社員間の転職を経験している者。
- ②非典型一貫：離学直後はパートやアルバイトなどの非正社員か、無業・失業状態などであり、調査時点も非正社員である者。
- ③他形態から正社員：離学直後はパートやアルバイトなどの非正社員か、無業・失業状態などであったが、調査時点では正社員である者。

高等教育中退者と専門・短大・高専卒、大学・大学院卒とを比べると、男女とも高等教育中退者では、「正社員定着・転職」がとりわけ少ない。また、男性の場合は20歳代では「非典型一貫」と「他形態から正社員」が多く、30歳代では「非典型一貫」が減り「他形態から正社員」が多くなっている。女性の場合は、20歳代、30歳代とも、「非典型一貫」が非常に多い。中退すると、離学直後だけでなく、その後も正社員になりにくいことがここからわかる。

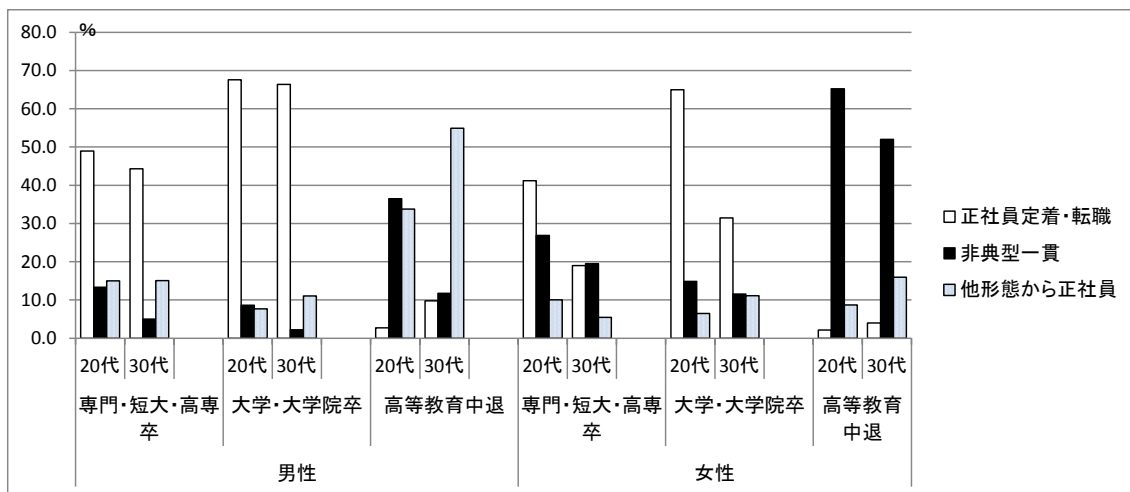


男性ではそれでも 30 歳代になれば正社員になっている人が多い。30 歳代まで一貫して非正社員である場合は 1 割程度と多くはない。それでも卒業者と比べれば、数倍の比率であり、30 歳代になっても中途退学をしたことの影響は残っている。

一方、女性の場合は、20 歳代でも 30 歳代でも正社員に変わった人は少ない。女性の 30 歳代は、子供ができて専業主婦になったり、むしろ正社員からパートに変わったりする人が多い時期である。それだけに非正社員のほうを選択している人も少なくないと思われるが、正社員としての働き方を望んでも機会がないという可能性も大きい。男性よりも正社員としての採用口が少ないだけに、職業キャリアを築くのは厳しいのではないかと推測される。

「委員会調査」の対象者は 30 代前半までであるが、正社員になっていた人は 3 人とごくわずかであった。30 歳代までもキャリア形成の難しさを引きずることは、この調査結果でも同様に見えることである。

図 1 都内在住の 20 歳代、30 歳代の教育暦別職業キャリア（高等教育経験者のみ）



出所：JILPT(2012)および(2013)から筆者作成

男性では、30 歳代になれば正社員に変わっていた人が多いが、学卒直後から正社員であった場合と、途中から正社員なった場合とでは、就業先の企業規模や就業職種の特徴が異なり、また、労働条件が異なる。表 2 は、30 歳代調査から、現在正社員である人について、これまでのキャリアによって賃金や労働時間の平均値がどの程度異なるかをみたものである。

中途退学者に多い「他形態から正社員」型キャリアでは、男性でも女性でも、年収が低く、1 週間の労働時間が長い傾向がある。新卒正社員で定着して来た「正社員定着」型キャリアの人と比べると、勤続年数が半分程度なので、年収が少ないのはそこから来る部分が大いであろうが、「正社員転職」型キャリアの人とは、勤続年数はほとんど変わらない。それでも年収にはかなりの開きがあり、現在の就業先に採用される前のキャリアの差がここに現われていることが推測される。中退後、時間をかけて正社員になっている人は少なからずいるものの、労働条件の上では、ハンディが残るケースが多いということであろう。

表2 正社員のこれまでのキャリア別にみた労働条件の特徴（都内在住の30歳代）

|    |          | 2011年30代調査 |                  |                  |                    |               |                    |             |
|----|----------|------------|------------------|------------------|--------------------|---------------|--------------------|-------------|
|    |          | 対象数        | 昨年の年収*1)<br>(万円) | 週労働時間*1)<br>(時間) | 時間当たり収入*2)<br>(千円) | 年収の対正社員定着比*3) | 時間あたり収入の対正社員定着比*4) | 勤続年数<br>(年) |
| 男性 | 正社員定着    | 274        | 570.2            | 51.5             | 2.13               |               |                    | 12.3        |
|    | 正社員転職    | 201        | 496.0            | 52.7             | 1.81               | 87            | 85                 | 5.9         |
|    | 他形態から正社員 | 156        | 424.3            | 52.8             | 1.55               | 74            | 73                 | 6.7         |
| 女性 | 正社員定着    | 111        | 401.9            | 41.4             | 1.87               |               |                    | 12.1        |
|    | 正社員転職    | 49         | 407.6            | 43.8             | 1.79               | 101           | 84                 | 6.0         |
|    | 他形態から正社員 | 67         | 321.5            | 44.3             | 1.40               | 80            | 66                 | 5.4         |

出所：JILPT（2013）

#### 4. 20歳代、30歳代の中退経験者の意識

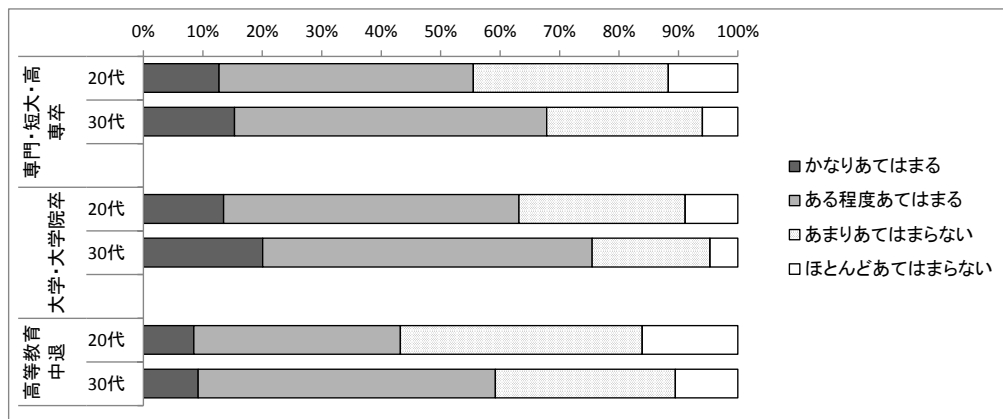
次に意識の面をみてみよう。意識に関わる項目では、現在と将来についてどう評価しているかをみるために、「現在の生活に満足している」「将来の見通しは明るい」の2つの項目について、「当てはまる」～「ほとんど当てはまらない」の4段階で評価してもらった結果を示した。

まず、①現在の生活への満足感については、20歳代でも30歳代でも、中退を経験した人の方が、卒業した人より低い傾向がある。30歳代のほうが卒業の場合との差は大きい。②将来の見通しについては、差はさらに大きい。20歳代の中途退学から間もないときには、「ほとんど当てはまらない」「あまり当てはまらない」をあわせて8割と非常に多く、将来の見通しがもてない、大変不安な状態であることが窺える。30歳代になれば、男性の多くは正社員などに変わっており、かなりこの比率は減るが、それでも同年代の卒業者に比べれば、将来に明るい見通しが持てない人が多い。

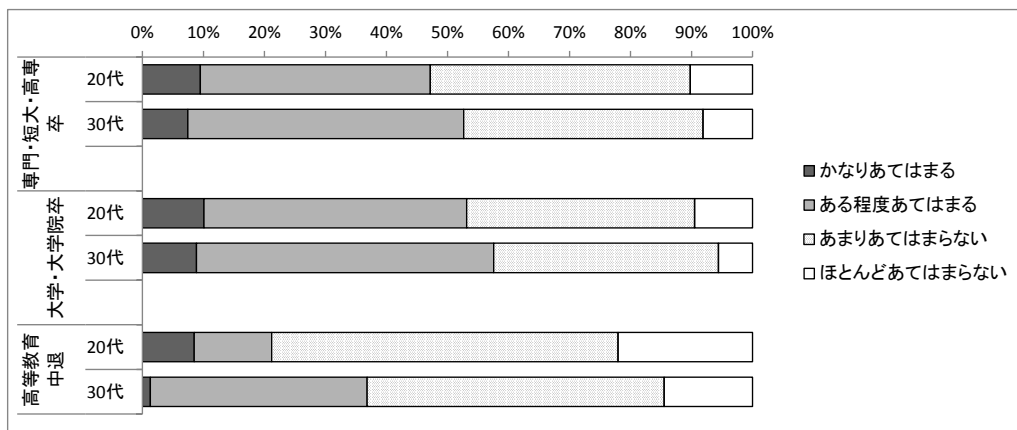
正社員になっても、労働条件は恵まれない場合が少なからずある。そうしたことが、この将来を明るく見通せない人の多さにつながっていると考えられる。

図2 都内在住の20歳代、30歳代の教育歴別意識の特徴（高等教育経験者のみ）

#### ①現在の生活に満足している



## ②将来の見通しは明るい



出所：JILPT(2012)および（2013）のデータを筆者が特別集計

## 5. 中退の背後の事情

ここまで、中退後のキャリアと意識の現実を見てきたが、少し中退の背景にあるものについても検討しよう。

先に引用した文部科学省の調査では、高等教育を中退する理由としては、「学業不振」と「学校生活への不適應」が合わせて 2 割程度、「経済的理由」と「就職」が合わせて 3 割程度となっていた。また、「学業不振」と「経済的理由」はいずれも私立大学に多いという特徴があった。

この理由の背後にあるものを示すデータが、JILPT 調査から得られる。表 3 に示したのは、高等教育を中退した人と卒業した人を年齢段階別に分けた上で、それぞれの場合の父母の高等教育卒業率、および、生家の経済的豊かさについて本人がどのように認識しているかを数値化して示したものである。

この表からいえることは、第一に、生家の豊かさについての認識は、中途退学した人の場合はその平均値がマイナスを示していることである。マイナスは「豊かでない」という認識の人が多くを示す。「経済的理由」が退学理由になることが少なくなく、特に私立大学の場合に多いのは、親の世帯が決して豊かではなく、相対的に学費の高い私立大学で、とくに子どもの学生生活を支え切れなくなることが多いということであろう。

もう一つ指摘できるのは、父母が高等教育を経験していない場合が、卒業者に比べて中退者では多いことである。特に、20 歳代の若い世代ではその差が顕著である。近年、大学進学率が高まる中で、父母・兄弟には大学教育の経験がない「大学進学第一世代」が増えていると推測されるが、そこにもひょっとしたら中退の遠因があるかもしれない。大学での学びの在り方は、高校までとは異なり、板書を写すというような受動的な学びではなく、自らの興味と関心によって主体的に学ぶというのが、伝統的な認識であったろう。そうしたタイプの学びが、「大学進学第一世代」ではあらかじめ共有されていないことが考えられる。学び方に戸惑ったまま、「学業不振」に陥ったり、大学での居場所を得られず「学生生活への不適應」をおこしやすくなっていることも考えられる。

表3 本人の教育層別にみた親の学歴、生家の経済的豊かさの特徴

|                   | 対象数(N) | 親の大学・短大・高専卒業率 |       | 生家の経済的な豊かさ* |       |
|-------------------|--------|---------------|-------|-------------|-------|
|                   |        | 父             | 母     |             |       |
| 高等教育<br>中退        | 20-24歳 | 64            | 37.5% | 31.3%       | -0.14 |
|                   | 25-29歳 | 56            | 44.7% | 42.9%       | -0.27 |
|                   | 30-34歳 | 41            | 43.9% | 31.7%       | -0.50 |
|                   | 35-39歳 | 35            | 42.9% | 11.4%       | -0.38 |
| 大学・大<br>学院卒       | 20-24歳 | 315           | 68.0% | 58.4%       | 0.41  |
|                   | 25-29歳 | 531           | 68.3% | 56.2%       | 0.26  |
|                   | 30-34歳 | 362           | 57.2% | 47.8%       | 0.52  |
|                   | 35-39歳 | 341           | 49.9% | 29.6%       | 0.48  |
| 専門・短<br>大・高専<br>卒 | 20-24歳 | 289           | 44.0% | 33.3%       | -0.01 |
|                   | 25-29歳 | 301           | 39.2% | 29.2%       | 0.07  |
|                   | 30-34歳 | 303           | 29.4% | 25.7%       | 0.14  |
|                   | 35-39歳 | 316           | 35.1% | 22.8%       | 0.14  |

注\*：「豊かである」=2点、「やや豊かである」=1点、「わからない」=0点、「あまり豊かでない」=-1点、「豊かでない」=-2点とした時の平均値。

出所：JILPT(2012)および(2013)から筆者作成

## 5. 何にどう対応すべきか

離学後の実態をデータで見れば、大学中退から先のキャリアには多くの困難があることが明らかである。ただし、すべて平均値や比率でみての話であり、中退経験をマイナス評価せずに採用する企業はあるし、そこで高い賃金を得たり、やりがいのある仕事に就いている人もいる。あるいは、将来に希望を持って道を切り拓いてきた人も少なくない。

それでも中途退学が生む平均的な厳しさについて社会は認識すべきだし、背景に本人の責によらない階層的な要因があるのであれば、さらに、社会としての対応を考えるべきである。

大学においては初年次教育を徹底して大学生としての学びを訓練し、あるいは高校との接続を意識してホームルーム機能などを強化すべきだろう。また、今回の「委員会調査」で明らかになった、退学するまでにはかなり長期に学校に行かなくなる時期があること、その間の相談先はほとんど家族に限られているという点は重要である。この期間に事態を把握し、本人の行き詰った思いを理解して、より広い視野を提供するような働きかけをすることができれば、もっと生きやすい道を見つけられるかもしれない。大学の学生支援部門や教員の役割の部分もあるし、学外の支援機関だから提供できる情報や支援もあるだろう。社会としての対応の在り方の枠組みを作る役割は、行政に最も期待されるところである。

## 引用文献

労働政策研究・研修機構(2012)『大都市の若者の就業行動と意識の展開―「第3回若者のワークスタイル調査」から―』労働政策研究報告書 No.148.

労働政策研究・研修機構(2013)『大都市における30代の働き方と意識―「ワークスタイル調査」による20代との比較から―』労働政策研究報告書 No.154.

中央教育審議会(2011)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』

## はじめに

平成 23 年 3 月より、大学、支援団体、行政の各分野から 21 名の委員を募って、大学等からの中途退学者の問題について話し合いの場を持ってきた。その回数は、18 回におよび、貴重な意見交換の場となった。その意見交換の場での意見や調査結果、更に 12 人の委員からの提言書を加味して、中途退学に関する考察と提言とする。

中途退学には、学業不振、人間関係、経済的理由など、様々な理由が存在し、しかも 1 つの場合もあれば複合的に重なり合っている場合もある。本委員会はその中でも、人間関係や学習意欲の喪失など、意欲の減退による消極的な中途退学の問題の焦点を当てて議論を重ねてきた。これを反映し、以下の考察及び提言は、消極的退学により社会的に孤立してしまう問題の解消という視点からのものである。

## 中途退学の課題の整理

まず、大学等からの中途退学（以下文中の「中途退学」は大学等からの中途退学を示す）は、個人的な問題なのか、何が問題なのかについて述べたい。

### 【中途退学に対する社会的関心の低さ】

日本の大学等の中退率は 10%から 12%（日本中退予防研究所「中退白書 2010」）に達するというデータがある。栃木県内の高校から大学等への進学者数は 10,232 人(平成 23 年 3 月)、中退率が 10%と考えると、毎年約 1,000 人の若者が中退していることになる。支援団体・大学ともに、中途退学者数が増加傾向にあると感じているが、中途退学者数は公表されていないため実態が分かっていないそのことがこの問題を見えにくくしている。推計とはいえ、毎年約 1,000 人という数字は、栃木県の若年無業者約 8,100 人に比しても、一考に値する数値である。また、中途退学後に 53%の若者が就職活動を行っておらず、中途退学者が非正規雇用で働く傾向にあるという調査結果からも、今後、雇用問題、社会問題として注目すべき問題であるといえる。

### 【大学・地域・行政間の情報共有の不足】

中途退学者の存在が社会的に認識されていない背景として、大学が中途退学者数を公表していないことに加え、行政や支援団体も今まで強い関心を持っていなかったために、三者の情報共有が行われていないことがあげられる。実際に、栃木県内にどれだけの中途退学者がいるのかは分っていない。特に、県外へ進学した場合は把握が困難である。平成 23 年度の県内全日制高校出身者が県内大学に進学する比率が 23%だったことを考えても、中途退学者の情報を収集し、全様を把握することは容易ではない。

### 【中途退学後の地域の支援機関との連携不足】

県内大学において、大学の関係者に地域の支援機関の情報が届いていないことが本委員会で明らかになった。そのため、中途退学を選択した若者は、所属する場所が無いだけでなく、相談機関等に関する情報もないまま孤立している。調査結果から見られる

ように、意欲の低下した若者が自ら情報を得て支援機関の門をたたくことは稀であり、支援団体においても、家族が相談機関を訪れるまでこの問題が放置されていると共通認識されていた。

### 【学生の変化】

少子化や社会情勢の変化によって、大学全入時代を迎え、大学に入学しやすくなり、幅広い層が進学している。それに伴い、大学への進学目的を明確に認識しないまま入学する学生や、学力不足のまま入学する学生の増加、近年注目される発達障害が疑われる学生の存在など、学生が変化していることが見えてきた。こうした学生の変化に対して、大学側は対応に尽力しているが、発達障害については、問題として認識され始めたばかりで支援体制が未整備な場合も多く対応しきれていない。さらに、問題を抱えた学生が担任制、オフィスアワー<sup>(※)</sup>、相談室の整備など、縦横に企画された支援策を上手く活用できないという状況が起きている。

これらの背景にあるものとして、調査結果に見られるように、「将来の夢がない」など、自らの将来像を描くことができず、また、親以外の人との関係性も希薄で、自主性が弱いなどの傾向があることも問題点として認識された。中途退学した若者の40%以上が入学後半年以内に学校に行かなくなっていることや、中途退学を考えたときに相談した相手がほとんど家族だったことにその一端が見える。これらについて、幼少期からの生活体験の希薄さ、多様な人との関わりが少ないことなどを多くの委員が原因としてあげ、大学に入学する以前の問題にも一考の余地があることが認識された。

※オフィスアワー：学生からの質問や相談に応じるために、教員が必ず研究室など、あらかじめ指定した場所に待機しておく時間帯。

### 【就労環境の厳しさ】

近年の就職状況の厳しさから、中途退学を選択した若者の多くもまた安定的な仕事に就くことが困難になっている。大学が学生の就職活動に手厚いフォローをしているのに対し、中途退学を選択した若者は、就職活動に必要な情報を得られないことも多く、調査結果にも、就職活動の際に困ったこととして「何をすればいいかわからない」、「どこに相談に行ったらいいかわからない」などの回答が見られた。

### 【社会的孤立の長期化】

中途退学により若者が社会的孤立状況に陥ると、孤立状態を解消する方策が本人や家族にゆだねられてしまうため、長期化しやすいという問題がある。調査結果からも、長期化によって多くの若者が更に意欲を低下させ、実際に動き出すまでに平均で1年5カ月の時間を費やしていることが分かった。その後の支援においても、孤立化により失った自信や社会性などを回復するシステムが整っていないため、例えば、就職しようとしても実際に就職につながるまでに更に時間を要することが認識された。

## 課題解決のために

### 【大学に求められているもの】

学生一人ひとりの将来目標や学修に関し、教職員がきっちりと向き合うことはもちろんであるが、問題を抱える学生の早期発見と、外部の支援機関と連携するためのシステムを早急に構築することが何よりも重要である。

#### ・相談体制、学習支援について

既に多くの大学で実施されている支援の再整備として、心理面に関する相談体制の整備や学習支援（基礎学力アップ、履修相談、学修相談）を、より学生が利用しやすく、学生の実情に合ったものに見直すことが求められる。

#### ・キャリア教育について

初年次教育の中で、大学から就職への意味付けを明確にするとともに、入学目的が不明確な学生に対しては、卒業への明確な意義付けをすることで意欲を醸成するなど、キャリア教育の充実が求められる。その中では、ハローワークとの連携を図り、心理カウンセラーの相談などを活用していくことも重要である。

#### ・コミュニケーション力、人間関係づくり

次に新たな取組みとして、入学時における人間関係づくりの後押し、コミュニケーション能力を高め人間力を育てるカリキュラム（プログラム）の実施が必要である。特にコミュニケーション能力の構築には、地域やNPOと連携し、ボランティア活動などを通してチームで働く社会体験型授業の実施が有効である。その中でコーディネーター、リーダー役を担える学生を育成することで、孤立しがちな若者を学生間で支えあうことにつなげていく。

#### ・休学に関して

学生が、学ぶことを積極的に見直すため、休学や長期間の社会活動参加など、一定期間の猶予を得られるようにする支援を検討する必要がある。併せて、休学にかかる費用を減額または無料化<sup>(※)</sup>するなどの経済的な支援の検討も必要と思われる。

※大学によっては、既に休学期間の授業料免除が実施されている。

#### ・教職員へのアプローチ

教職員の「中途退学による社会的孤立」への認識を深める機会を設けることが重要である。そこでは、中途退学の問題を内包した学生の存在を理解し、大学で学ぶ意味をいかに伝えるべきかなど、教職員と学生の認識の誤差を修正することができる。

また、職員、教員などの学生に直接関わる部署が、地域の公的な相談機関や、民間の支援団体・組織の活動を知り、連携、活用することも必要である。

#### ・家族に対して

家族に対して、問題を家族間で抱え込まないことの大切さを啓発する必要がある。その意味で、必要に応じ、行政・地域の支援団体の情報を提供することが求められる。

### 【支援団体に求められているもの】

若者支援機関では、従来、来所した若者への相談やグループワーク、就労支援を実施



してきた。そうした支援は引き続き必要であるが、今後は大学等教育機関との連携の強化が求められる。例えば本委員会が開催したシンポジウムや、種々の方法による広報活動、定期的な情報交換の場の設定、教育機関との連携による問題を抱える学生に対するカウンセリングなどである。

また、支援団体には、環境・農業・林業など多方面にわたって、行政の手が届かない社会問題の解決を、グループ活動やボランティア活動により実施してきた実績がある。支援団体が得意分野とするところを大学と連携して担うことで、より効果的で多角的な学びが可能となる。

### 【行政に求められているもの】

#### ・地方自治体におけるネットワーク構築機能と支援策の実施

中途退学の問題に対し、大学と支援団体が連携して取組むに当たっては、両者が信頼しあい、良好な関係にあることが大切であるが、両者をつなぎ、コーディネートする存在として行政が関わることで、よりスムーズに関係を築きやすくなる。そのため、地方自治体には、関係機関や関係者のネットワークを構築する役割を担うことや、問題解決のために行政の資源を提供することが求められる。

#### ・適切な経済産業対策の実施

安定した良質な雇用の場を十分に確保すること、社会的弱者（ニートの若者や障害を持つ人々など）の雇用を企業が維持することを実現するためには、国として、地域としての経済産業の発展がまず不可欠である。

### 【家族に求められるもの】

意欲の低下している若者が、「何をしたらいいか」、「何もする気持ちにならない」という中、本人が何かしらの目標に向かって動き出すためのきっかけ作りを家族が担っていくことが求められてくる。

問題を抱え、在学か中退か、中退の場合の進路をどうするかなど、進路の分岐点に立った学生に対する家族の対応の仕方は、学生のその後を大きく左右する。初期の関わり方により、解決までの道のりが長引くこともあり、この時どのように関わるかを家族も学ぶことが必要である。そのために家族自らも相談機関の情報を入手し、必要に応じて相談機関を利用することが必要である。

### 【社会全体に求められること】

中途退学をした若者は、非正規社員で職業人生をスタートすることが多く、その後の職業人生において不安要素が高まる。社会システムとして、若者が不安定な就労を継続させないためには、企業や、社会に求められることも大きいといえる。

#### ・企業の経営理念・方針における認識

多くの企業で、人を大切にする経営、長期的視点からの人材の確保と育成、若者の積極的な雇用と育成について認識することが求められる。

#### ・複線型の進路選択のシステムの検討

「全員が大学に行く」ことを目指すような社会の在り方、人々の考え方の見直し、進学前のキャリア教育を通し、進学目的の明確化、進路選択の幅の拡大を図るなど、



社会全体の意識の変革が求められる。

大学進学を選択する場合であっても、大学入学前に社会経験を積むなど、視野を広げ、学びの必要性を実感する機会をつくる仕組みの検討が必要である。また、入学後、学びの目的意識が明確でなかったり、学ぶことに意欲がわかなかったりする学生もいる。そのような学生に対応するため、半期や1年間休学し、社会と学校を行き来できるような柔軟なシステムも検討されるべきである。

#### ・地域、社会が子育てを担うという認識

現在、社会環境の変化から、親が気づかぬうちに過保護・過干渉になる傾向があり、若者自身の自己肯定感や自尊心が低いことが問題となっている。また、人との関わり方や主体性、チャレンジ精神、学習習慣など、自ら考え決断し行動出来る若者の育成も重要な課題である。そのためには、幼少時から地域の人々と関わり、関係機関などとも連携して、社会全体で若者を育成していくことが求められる。

#### 【学生本人に求められるもの】

大学に入学するにあたって、本人の心構え、努力も問われなければならない。なぜこの大学・学部に進学するのかなど、自らの主体的な問いかけとキャリアデザインを描くこと、さらに、困難な問題を抱えたときに、問題を抱え込まずに「誰か」にSOSを求めるなど、自ら動く努力をすることが求められる。

#### 最後に

##### 【地域社会の中における、「人」のネットワークの構築が必要】

成長段階の様々な問題が集約された場が大学であり、社会への不安がついに実体化したものの一つが中途退学である。そのため、大学で対応しきれない問題も内包している。幼少期から義務教育を経て高校までの過程において、多様な人と関わる事が少なかったために人間関係構築力が弱いこと、自然体験や日常と違う環境(不便さ)に触れる機会が少ない社会環境、少子化による過保護や過干渉など、その背景は実に深い。更に、中途退学後もそこから派生する問題が個人の問題として捉えられるため、親も子も家庭内で問題を抱え、問題解決が困難なものになっている。

中途退学の問題は、大学だけの問題でも、家庭内だけの問題でもなく、社会全体で考えなければならない問題である。本委員会の意味は、中途退学の問題が極めて社会的な問題であると一石を投じたことにある。しかしながら、委員会の活動は問題解決に向けての初歩であり、シンポジウムや情報共有のために本委員会で検討し独自に制作したりリファパッケージ<sup>(※)</sup>もその一歩に過ぎない。今後も、中途退学による社会的孤立を防止するため、行政はもちろん、地域の支援団体と大学が連携し、継続的な取組が図らなければならない。

※リファパッケージ：リファとは、相談を受けた専門家が、別の専門家のほうがより良い結果を得られると判断した場合、責任を持って別の専門家を紹介することをいう。ここでは、支援団体がネットワークをあらかじめ構築し、相談の内容によっては、問題解決のために最適と思われる支援団体と連絡をとりあい、相談者を当該支援団体へ紹介する仕組みをいう。

(P84 参照)



# 第 3 部

# 資 料

## 大学生や中途退学者の悩みを考えるシンポジウム 概要

---

【タイトル】 大学生や中途退学者の悩みを考えるシンポジウム  
～中途退学者の社会的自立を考える～

【日時】 2013年2月6日（水）13:30～17:00

【会場】 栃木県庁 研修館講堂他

【目的】 本委員会を通して明らかになった若者の現状報告と、中途退学に関わる社会的背景や支援の必要性を広く周知するとともに、専門家によるディスカッションを行い、問題解決への道筋を見出す。さらに、若者に関わる教育機関・行政・NPO等支援団体・保護者が繋がり合う場として、参加者の相互交流の機会を設け、今後の若者支援への新しいステージの幕開けの場とする。

【タイムスケジュール】

13:30

あいさつ

栃木県県民生活部次長兼県民文化課長 角田孝之 氏

NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事 岩井俊宗 氏

13:40～14:00

事業報告

NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事 岩井俊宗 氏

14:10～15:45

パネルディスカッション

テーマ 大学等からの中途退学者アンケートより見えてきたこと

パネリスト

独立行政法人労働政策研究・研修機構 統括研究員 小杉 礼子 氏

NPO 法人NEWVERY 理事長、日本中退予防研究所所長 山本 繁 氏

栃木県連合教育会相談部長、日本学校教育相談学会栃木県理事長 丸山 隆 氏

コーディネーター

とちぎユースワークカレッジ代表 横松 陽子 氏

15:50～16:00

支援団体紹介、総括

16:15～17:00

交流会 会場：研修館3階 302研修室

16:15～17:00

個別相談会 会場：研修館3階 301研修室

■支援団体パネル展示 講堂廊下にて展示（12団体）

## 【実施状況】

|           |      |
|-----------|------|
| シンポジウム参加者 | 118名 |
| 大学関係者     | 24名  |
| 行政関係      | 21名  |
| 教育関係者     | 7名   |
| 労働関係者     | 5名   |
| 若者支援団体    | 29名  |
| 一般        | 25名  |
| マスコミ      | 7名   |

交流会参加者 39名

相談会参加者 6組

## 【良かった点】

- ・現状や大まかな個別事例など知ることができた。（大学関係者）
- ・中途退学という問題について具体的な問題点が聞いたこと。（若者支援団体関係者）
- ・パネリストの先生方がそれぞれ異なる立場の方でそれが良かったです。（大学関係者）
- ・事例等も具体的にお聞きすることができ参考にさせていただきます。（行政関係者）
- ・4人の専門家による議論にそれぞれ特徴があり面白かった。（行政関係者）
- ・中退者の現状について知ることができました。大学側、学生側の課題が少しでもわかりました。（保護者）
- ・退学に関する調査結果がわかってよかった。大学にとって予防取組みを急ぎ始めないといけない事だと認識を高めることができた。（大学関係者）
- ・具体的なデータや個別事例の話など（その他）
- ・明確で分かりやすいアンケート結果（当事者）
- ・大学中退者についてよく調査・分析されていてそれらの報告がわかりやすくよかった（当事者）
- ・データを元に現状把握ができた。（行政関係者）
- ・現状（県内）の確認内容がわかりやすかった。（大学関係者）
- ・事業の主旨、内容がよくわかった。データやメカニズムがよくわかった。（大学関係者）
- ・報告書（大学関係者）
- ・山本先生による現状と対応事例（大学関係者）

## 【改善点】

- ・データの報告としか思えなかった。（保護者）
- ・問題の投げかけのテーマを整理したほうが良いと感じた。（行政関係者）
- ・もう少しスケジュール的に質疑応答のできる時間があってもよかった気がする。
- ・団体の方が挨拶して下さった内容が文書でまとめられたものがあると良かった。（大学関係者）
- ・もう少し時間がほしかった。（行政関係者）
- ・もう少しお一人ずつの時間があってもよいのではと思う。（大学関係者）

- ・ 団体説明の時間が少なかった。（行政関係者）
- ・ 何か当事者そのものが不在といった印象が残った。（その他）
- ・ もう少し時間があってもよかった。（行政関係者）
- ・ ポインターが見えず、シンポジストがどこを説明しているのかわかり辛かった。（行政関係者）
- ・ 中途退学をした当事者の参加が少ないように思えた。当事者の参加を更に積極的に呼びかけるような取組みにしてはどうか。（当事者）
- ・ 席が狭く休憩時間も取れないスケジュールなので少々体が痛みました。会場もしくは座席にもう少し余裕が欲しかった。（大学関係者）
- ・ 論点が見えないかな？山本さんはデータで分析して人を見ない医者と同じかな好みの問題かもしれません。（若者支援団体関係者）

#### 【今後してほしいこと】

- ・ 中学・高校生に職業案内のような事を実際に教えて欲しい。（保護者）
- ・ 第2回シンポジウム（行政関係者）
- ・ 大学生の就職問題との関係のリンクも、大学の魅力 up へ繋がると思う。（行政関係者）
- ・ 個々の若者支援団体の活動紹介とノウハウ紹介をしていただけるとうれしいです。（若者支援団体関係者）
- ・ 環境問題（行政関係者）
- ・ 大学での NPO の方々と大学との交流会でしょうか。（大学関係者）
- ・ 若者支援の活動についての詳細。（行政関係者）
- ・ 開催時期を学務の暇なときにする。（大学関係者）
- ・ 立岩真也の行っている「差異」あたりをもう少し考える、あるいはベーシックインカムを考えるのは。（若者支援団体関係者）

#### 【その他 自由記載】

- ・ 大学に行くには目的意識を持ってと今回も言われておりました。わが子は残念なことに何もわからないからとりあえず大学に行きたいと申します。親としてはどのように導くかわからないので参加しました。今回の話の内容が良く飲み込めました。（保護者）
- ・ 調べた数字も大切だが人を人間として扱う、ともに考える！！丸山先生の話はとても良かった。仕事を休んで来ました。明日につなげる温かい話が聞けました。ピアカウンセラーについては仕事でも兄貴分姉貴分といった事を 30 年前から当社（原文のまま）では行っています。それにより退職者も少なく定年まで勤務する方が多いです。小・中・高・大学でもそうだと思います。（保護者）
- ・ データ分析や具体的な事例に基づき、様々なお立場からのお話が聞けて大変参考になりました。（行政関係者）
- ・ 前日申し込みに関わらず出席させていただきありがとうございました。1 年半にわたる真摯な委員会の取組みを知り感銘を受けました。大学側の方たちにも是非課題に具体的に取り組んでいただけたらと願います。（保護者）

- ・ 大学中退者の調査に関して、彼らの両親が子どもに対してどのような接し方をしてきたのかを探り、分析してみると新たな一面が浮かび上がってくるかもしれない。  
(当事者)

# 大学生や中途退学者の悩みを考える シンポジウム

～中途退学者の社会的自立を考える～

## 事業報告 調査研究報告

中途退学者の課題・支援検討委員会

岩井俊宗

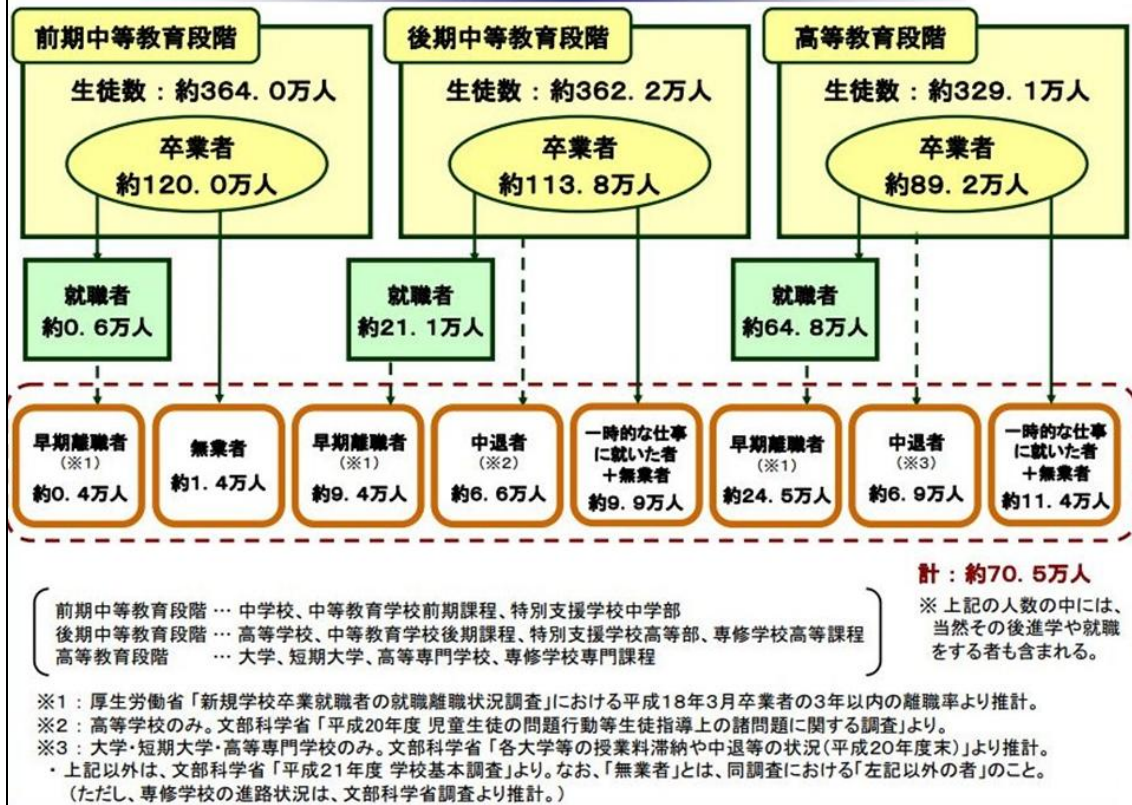
(NPO法人 とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事)

## 中途退学者の課題・支援検討委員会 設置の背景

- ・ 大学の中途退学率 10% (OECD Education at a Glance2012)  
12% (日本中退予防研究所「中退白書2010」)
- ・ 県内高校→大学等進学者数9,679人(H23)、中退率10%—960人(4年間)
- ・ 大学等高等教育機関、中途退学者の情報が出されていない。  
→ その実態を把握することが難しい。
- ・ 中途退学者は学校から離れると家庭以外に所属がない  
→ 社会的孤立の状況に陥る。
- ・ 社会的孤立は長期化すれば問題の解決が難しい。  
(内閣府の『ひきこもり支援読本』によれば、ひきこもりの状況にある若者が、ひきこもり始めてから支援開始までの期間で、5年以上10年未満(21.8%)、10年以上(13.0%)が相当数いることから、容易に長期化する傾向。)
- ・ 退学時から支援スタートまでに時間差が生じる。
- ・ 時間差がある程、支援に関わる時間も長く、支援も難しくなる。



## 各学校段階における卒業生・中退者の状況（一部推計）



## 中途退学者の課題・支援検討委員会

中途退学による社会的孤立を防ぐため、  
 学校・地域・行政が協働(プラットフォームを構築)し、  
 中途退学者の社会的孤立や社会的空白を生まない  
 支援策について協議し、試験的实施に繋げる。

2012年3月 第1回「課題・支援検討委員会」～

# 構成メンバー

## 【大学】

帝京大学 宇都宮キャンパス キャンパスライフ支援センター  
 宇都宮共和大学 シティライフ学部 学生課・キャリア相談室  
 文星芸術大学 キャリアセンター  
 宇都宮大学 キャリア教育・就職支援センター  
 作新学院大学  
 足利工業大学

6大学

## 【民間支援団体】

一般社団法人 栃木県若年者支援機構  
 一般社団法人 とちぎ青少年自立援助センター  
 とちぎ若者サポートステーション  
 NPO法人 トチギ環境未来基地  
 NPO法人 KHJとちぎベリー会  
 NPO法人 キャリアコーチ  
 NPO法人 とちぎユースサポーターズネットワーク  
 とちぎユースワークカレッジ

8団体

## 【行政】

栃木県県民生活部青少年男女共同参画課、保健福祉部医事厚生課、  
 産業労働観光部労働政策課、県教育委員会学校教育課、  
 県民生活部県民文化課

5部署

## 審議の過程

17回の委員会 全体会6回 部会11回  
 延べ185人 述べ約34時間

### 平成23年度

◆第1回全体会 参加者：16名  
 日時：平成24年3月15日（木）10:00～12:00  
 会場：ぼ・ぼ・ら 研修室  
 内容：事業説明、顔合わせ、意見交換 他

### 平成24年度

◆第2回全体会 参加者：19名  
 日時：平成24年5月15日（火）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁昭和館多目的室4  
 内容：参加団体の紹介、プラットフォームの進め方について意見交換、中途退学者の実態把握 他

◆第3回全体会 参加者：17名  
 日時：平成24年7月11日（水）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁昭和館多目的室4  
 内容：アンケートの調査実施について、部会について 他

○第1回調査部会 参加者：6名  
 日時：平成24年7月26日（金）10:00～11:50  
 会場：とちぎユースワークカレッジ教室  
 内容：アンケートの調査票について 他

○第1回支援部会 参加者：9名  
 日時：平成24年8月9日（木）10:00～12:00  
 会場：とちぎユースワークカレッジ教室  
 内容：学生の状況把握、支援策のアイデア他

○第2回調査部会 参加者：8名  
 日時：平成24年8月9日（木）15:00～17:00  
 会場：宇都宮市総合福祉センター会議室  
 内容：アンケートの調査実施について 他

○第2回支援部会 参加者：7名  
 日時：平成24年9月5日（水）10:00～12:10  
 会場：栃木県庁本館8階会議室2  
 内容：学生の状況把握、大学の状況の把握 他

◆第4回全体会 参加者：17名  
 日時：平成24年9月12日（水）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁昭和館多目的室4  
 内容：各部の進捗状況報告、今後の運営について 他

○第3回支援部会 参加者：8名  
 日時：平成24年10月17日（水）10:00～12:10  
 会場：栃木県庁本館8階会議室2  
 内容：親との関係について、大学入学時の状況、支援策のアイデア 他

○第4回支援部会 参加者：8名  
 日時：平成24年11月21日（水）10:00～12:10  
 会場：栃木県庁本館8階会議室2  
 内容：サポートステーションと大学の連携について、支援団体の確認 他

○第3回調査部会 参加者：6名  
 日時：平成24年11月22日（木）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁本館県民生活部会議室2  
 内容：アンケート調査結果考察、個別ヒアリングについて 他

◆第5回全体会 参加者：17名  
 日時：平成24年11月28日（水）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁昭和館多目的室4  
 内容：アンケートの実施報告、支援策報告、シンポジウム講師及び日程について、今後の運営について 他

○第1回シンポジウム部会 参加者：9名  
 日時：平成24年12月6日（木）10:00～12:00  
 会場：ぼ・ぼ・ら 研修室B  
 内容：シンポジウム講師、進行、広報計画について 他

○第5回支援部会 参加者：5名  
 日時：平成24年12月18日（火）15:00～16:30  
 会場：宇都宮市東市民活動センター 第1会議室  
 内容：支援策チャートの検討、シンポジウムの内容確認 他

○第2回シンポジウム部会 参加者：7名  
 日時：平成24年12月6日（木）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁本館8階会議室2  
 内容：シンポジウム行動計画、追加広報について 他

○第6回支援部会 参加者：8名  
 日時：平成25年1月25日（火）13:00～15:00  
 会場：栃木県庁県民生活部会議室2  
 内容：支援策チャートの検討

◆第6回全体会 参加者：18名  
 日時：平成25年1月30日（水）10:00～12:00  
 会場：栃木県庁昭和館多目的室4  
 内容：シンポジウムの運営、報告書について 他

# 協議内容の流れ1 —相互理解、現状確認—

## [委員会内取り組みの共有]

委員会の共通理解、目的の確認

既存の取り組み(大学、行政、NPO)の確認

⇒既存の支援の仕組みを確認

⇒退学後と支援開始までの空白の確認

## [支援対象領域の確認]

⇒退学のし方の違いを確認

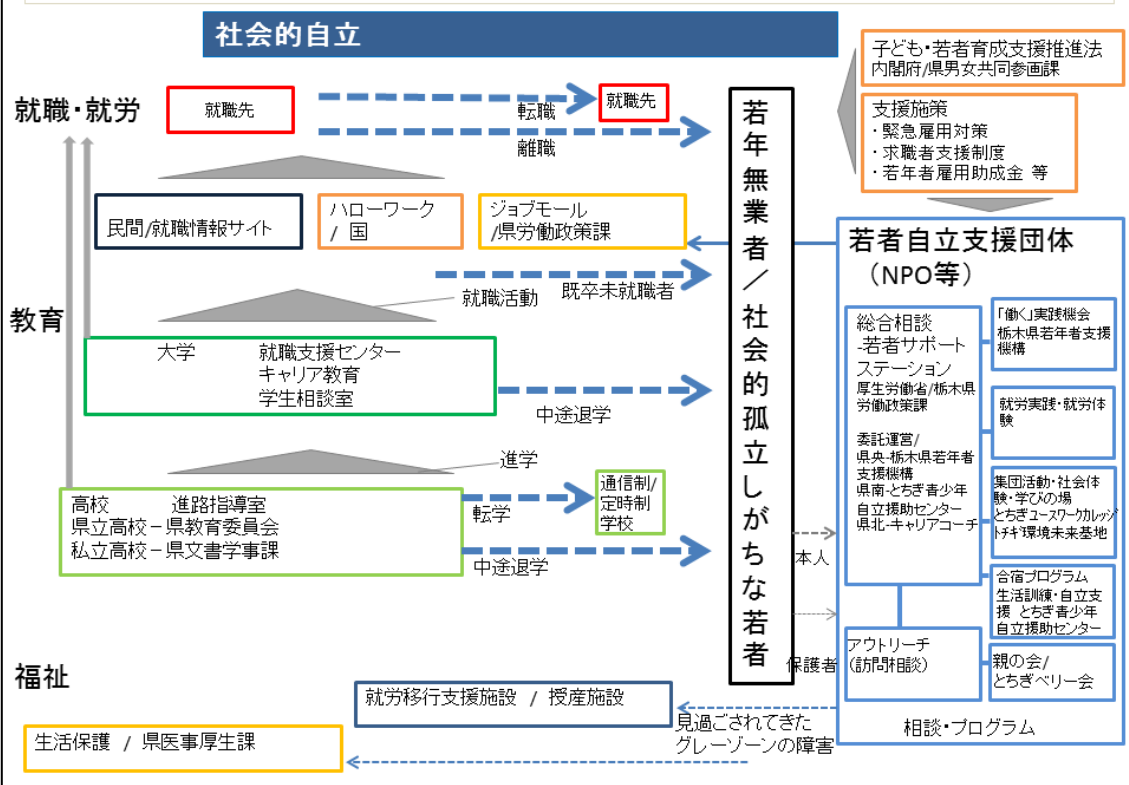
**積極的中退**(目的を持って退学)

**条件的中退**(本人以外のやむを得ない状況での退学。経済的、妊娠等)

**消極的中退**(明確な理由なき退学、人間関係に悩み退学)

## 第1回中途退学者に関わる課題・支援検討委員会 まとめ

24/3/15 県庁6階大会議室



## 協議内容の流れ2 —現状分析、仮説—

- **なぜ社会的孤立するのか**
  - 大学側の中退者への関わり・・・相談室、面談等はあるものの、外部支援の存在は知らず。
  - 支援団体側・・・アウトリーチなどするもの、基本的に保護者、本人の動き出しによる接点待ち。
- **消極的中退要因を検討**
  - 高校と大学の違い(カリキュラム自己選択、人間関係づくりも本人次第)。  
“自分で決める”、“自分から関わる”ができないと自然と孤立しがち。
  - 入学以前の社会体験、人との関わり、社会環境も影響。
  - ⇒総合的(社会的かつ個別的)な要因による現象として“中退”。

## 協議内容の流れ3 —実態の把握、調査づくり—

- **当事者の声、実態把握が必要。**
  - ⇒調査の実施(調査の設計から実施、まとめ)
  - ⇒中退経験者、大学、若者支援団体、それぞれに。
  - 中退経験者にはアンケートだけでなく、個別ヒアリングも。  
ケースとしても課題検討。
  
- ⇒調査報告を受け、それぞれの委員が提言。

## 協議内容の流れ4.1 —調査内容分析—

- 調査結果[中途退学経験者から、N=34]  
《在学時の状況》
  - ・休学期を経て退学
  - ・入学初期のつまづき →入学半年以内休学4割
  - ・サークル加入低い →加入している3割(全国平均7割)
  - ・入学前不登校経験(29%)
  - ・退学理由 —①学習意欲喪失 ②学力不振 ③人間関係
  - ・学校を続けるための行動しない。(79%)
  - ・中退の相談は、9割家族。学校、友人にしない。
  - ・中退後のイメージは、“仕事”か“何も考えていない”

## 協議内容の流れ4.2 —調査内容分析—

- 調査結果[大学・短大から]
  - ・手続きの流れ —ほぼ共通
    - ①本人とのヒアリング →②退学願の用紙を渡す →③本人・保護者の署名・押印  
→④届出願の提出。受理 →⑤「退学許可書」を送付
  - ・退学を予測される学生の把握 →①授業の出席、成績状況、②担当教官との面談結果
  - ・退学を予測される学生への予防的支援
    - ①学内相談機関で対応 ②特になし(3大学)
  - ・今後新たな支援を検討している →1大学のみ
  - ・支援団体から見る、中途退学者の増加の要因
    - ①経済的困難 ②基礎学力不足、低学力化 ③不本意入学、目的不足 ④将来不安、
  - ・中退防止に困難な点
    - ①経済的理由 ②マンパワー・対応職員の専門性不足 ③本人の「求め」が見えない。
  - ・中退後に予測される問題
    - ①フリーター、引きこもり、ニート予備軍 ②正社員としての就職困難、給与減 ③特になし(4大学)
  - ・外部団体との連携 無 100%



## 協議内容の流れ4.3 —調査内容分析—

- 調査結果[支援団体から]
  - ・「若者自立支援ネットワーク」内支援団体55団体の内、13団体が回答 →大学中退の課題意識低い。
  - ・支援対象者の中に、中退経験者がいるか。  
→いる(85%)
  - ・支援団体から見る、中途退学者の増加の要因
    - ①自我や対人関係の未熟さ、人間関係構築力の弱さ
    - ②動機の不足、将来不安
    - ③疾病、病気

## 協議内容の流れ5 —支援策の仮説—

協議内容、調査報告を受け、

人間関係構築力、当事者性や自我(自己理解)の弱い若者が、中途退学後、社会的孤立するリスクが高い。

- 在籍中、入学前に、緩やかに他者と関わるプログラムが必要
- 大学内の対応する教員、事務、相談員はいるもののトータルな連携がないのでは。(中退に関する共通理解等。)
- 学生個人の状態把握などは教員では難しく、適切に外部団体と連携し、また大学に戻ってくれるようにすることが重要。
- 大学入学前のしっかりとした動機づけ、キャリア教育。
- 中退後、孤立化させないために支援団体につなぐ。

## 協議内容の流れ6 ー支援策の検討ー

協議内容、調査報告を受け、**新たな支援策として**

- **在籍中に適切な支援の幅を広げるため、大学外部の支援機関との連携づくり。**
  - 大学関係者と支援期間の理解を進め、双方の信頼関係構築とできることの相互理解。
  - ⇒両者の顔が見える機会かつ中途退学に関する共通理解を図る機会
  - 本日のシンポジウム
- **中途退学や個別支援が必要な学生に対応する教員・相談員が使いやすい地域の支援団体のチャートと一覧情報(リファーマッパージュ)の作成・配布**

2013年2月6日

# 大学生や中途退学者の悩みを考えるシンポジウム 中途退学者の社会的自立を考える

NPO法人NEWVERY理事長  
日本中退予防研究所所長  
中央教育審議会「高大接続特別部会」臨時委員  
文部科学省高等教育局高等教育企画課専門調査員  
山本 繁

「新しいとでも」を若者に  
**NEWVERY**

「新しいとでも」を若者に  
**NEWVERY**

1

## 中退のメカニズム

中退抑制に効果的な取り組み

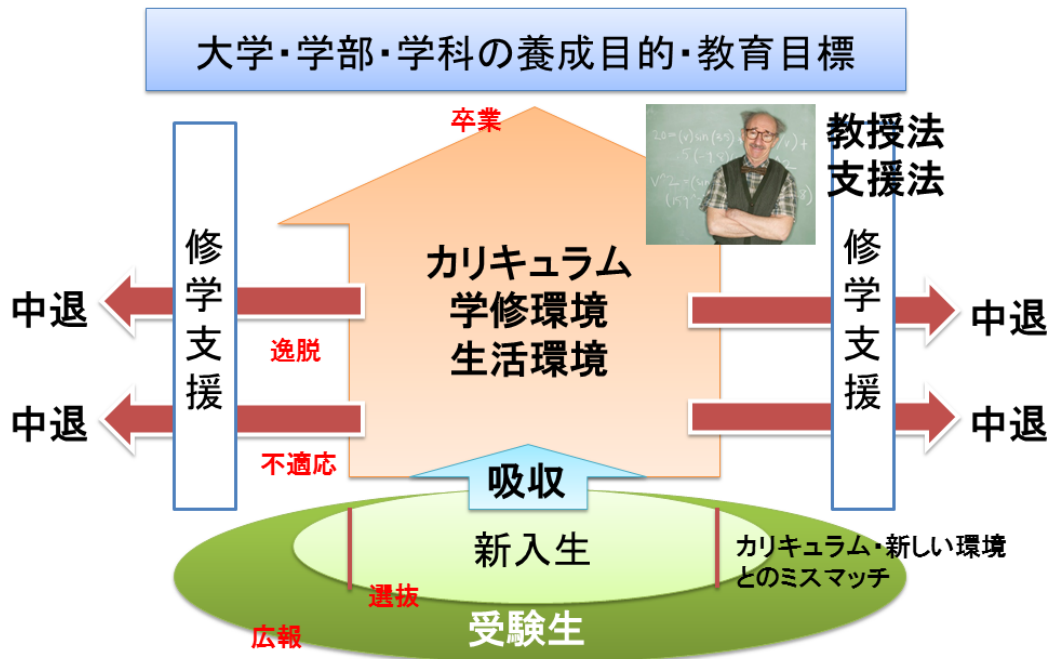
地域の支援者にできること



## 中退の発生メカニズム

「新しいとでも」を大事に  
NEWVERY

2



## 中退の主な原因

「新しいとでも」を大事に  
NEWVERY

3

これまでの研究結果から、中退の主な原因は類型化が可能。

| 中退の主な原因                       | 背景及び対策のポイント   |
|-------------------------------|---|
| 学生と、大学が提供している教育内容・教育方法とのミスマッチ | <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 背景: 学生の多様化(学生の興味・関心、生育・学習歴、アカデミックスキル・ラーニングスタイル等)</li> <li>□ 対策のポイント: IRを通じた学生理解の推進と、学生の変化に対する柔軟かつ迅速な対応</li> </ul>                    |
| 個々の学生が抱えている課題・事情              | <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 背景: 経済的困窮、発達障害、ソーシャルスキルの低下(一人っ子、共働き世帯の増加等)</li> <li>□ 対策のポイント: 大学の「課題解決能力」の強化(問題発見・問題解決のスピード・精度の向上)</li> </ul>                       |
| キャリア不安・将来不安と大学卒業価値の低下         | <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 背景: 女性の社会進出、少子高齢化、経済のグローバル化、新卒一括採用・終身雇用の終焉</li> <li>□ 対策のポイント: [組織的対応]学生のキャリアデザイン“力”の強化やキャリア形成の機会提供【個別対応】大学教職員のキャリア支援力の強化</li> </ul> |

中退のメカニズム

中退抑制に効果的な取り組み

地域の支援者にできること

## 入試広報・入学前教育

フダン着の大学に会いに行く

## WEEKDAY CAMPUS VISIT

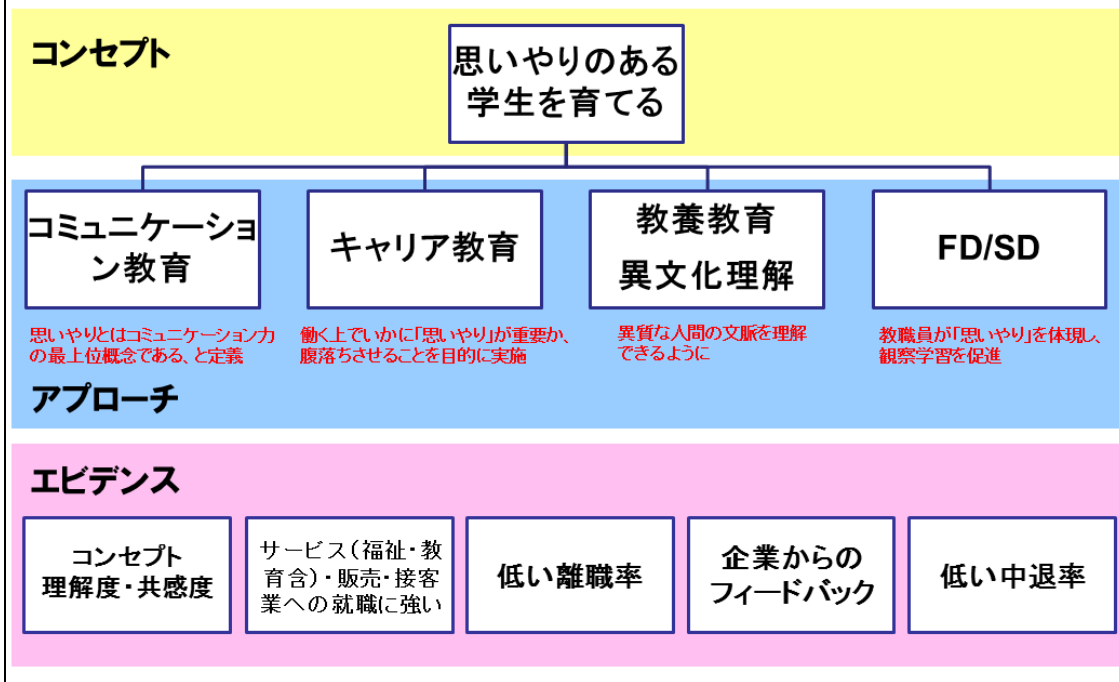


2012度は法政大学キャリアデザイン学部と立教大学経営学部で開催

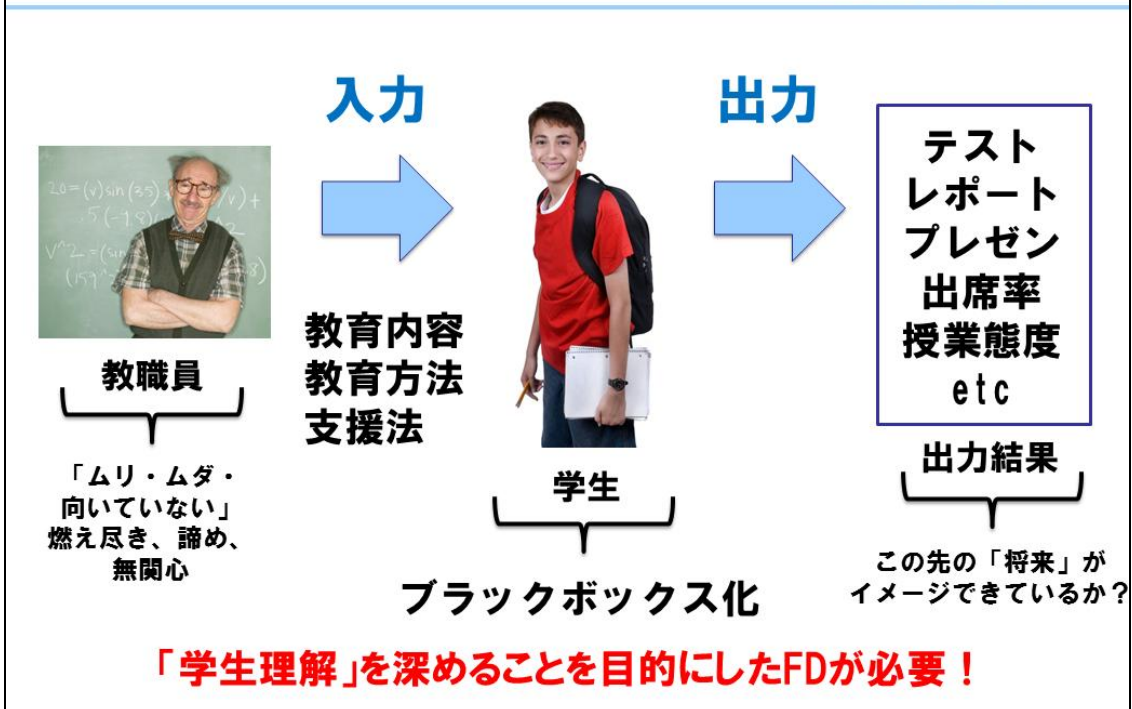
なぜこの大学なのか？なぜこの学部・学科なのか？答えられる新生者が少ない

(13年6月からファシリテーター養成講座スタート)

# カリキュラム改革(FD2.0)

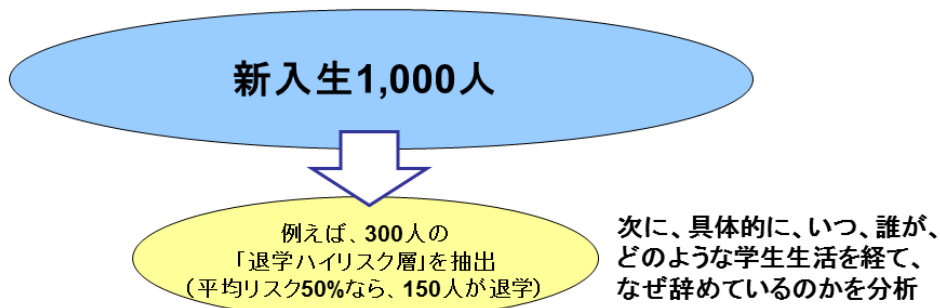


# ファカルティ・ディベロップメント(FD2.0)

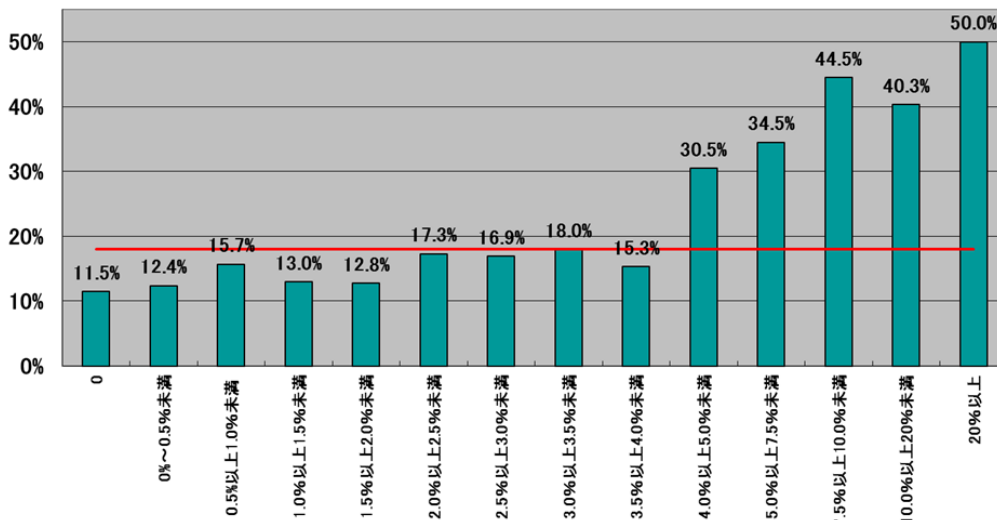


過去の退学状況から退学リスクの高い学生群を抽出し、早期発見・早期支援

1学年1000人で、卒業までに20%(200人)が退学するケース



退学に至った課題別に分類し、「必要な対策」を「必要なタイミング」で実施

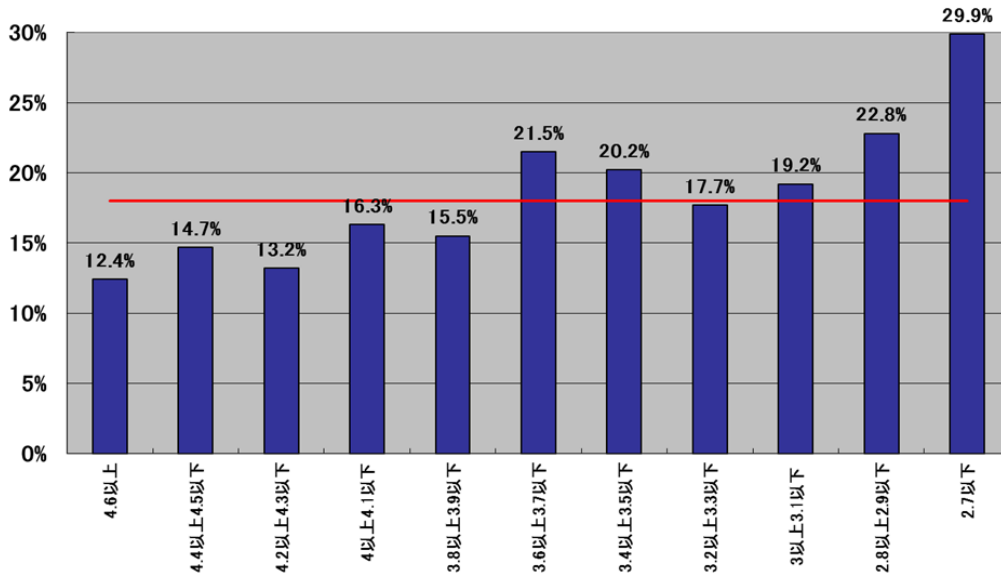


高校タイプ別シェア(2011年度)

|     |       |       |       |       |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|-----|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| シェア | 13.1% | 14.2% | 11.9% | 10.4% | 7.5% | 4.5% | 3.9% | 4.6% | 4.5% | 6.6% | 8.0% | 4.7% | 4.5% | 2.6% |
|-----|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|

## 高校評定平均別中退率 \*2008年度入学生(編入学除く)

10



高校タイプ別シェア(2011年度)

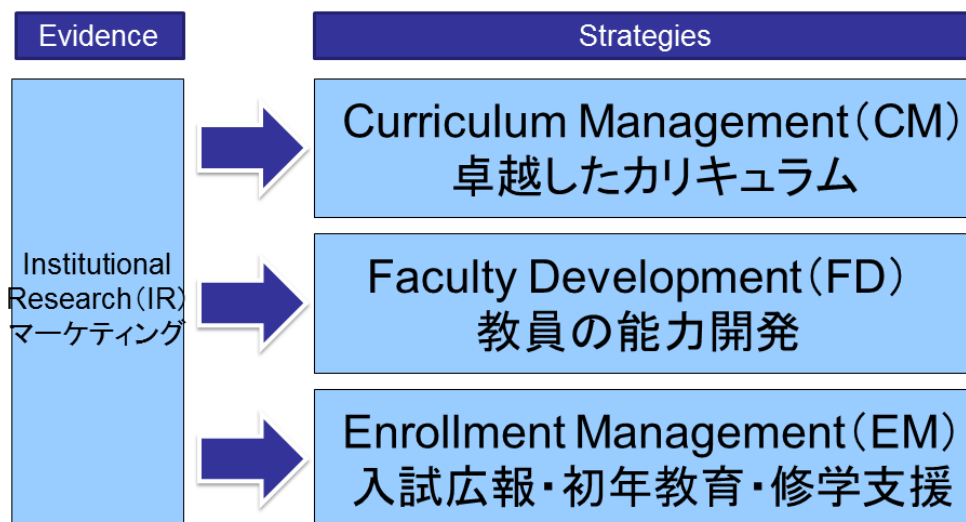
|     |      |      |      |      |       |       |       |       |       |      |      |
|-----|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| シェア | 4.6% | 3.2% | 5.6% | 8.3% | 11.7% | 12.5% | 15.3% | 13.8% | 12.2% | 7.4% | 5.4% |
|-----|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|

## まとめ:中退予防戦略とは?

NEWVERY

11

- 第1に、IRを根拠に、CM、FD、EMでそれぞれ何にフォーカスするか?  
 第2に、どのようにしてCM、FD、EMを高度化するか?



**中途退学を未然に防ぐ**

- (1) 入学前教育
- (2) 休学者の復学支援
- (3) インターンシップの受け入れ

**中途退学者を事後に支援する**

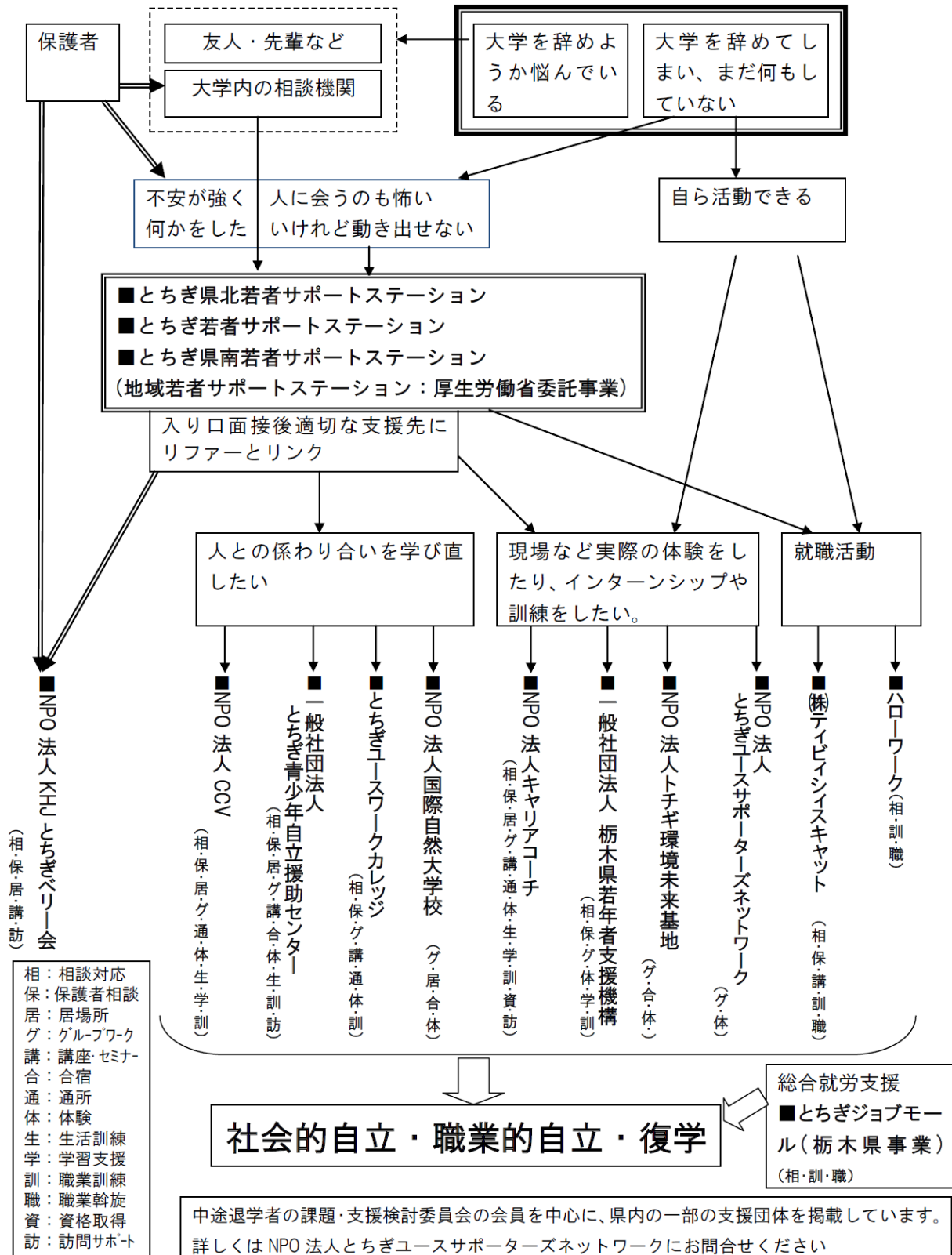
- (4) 大学・行政と連携した中途退学者の早期発見・支援

# ご清聴ありがとうございました

NPO法人NEWVERY理事長  
日本中退予防研究所所長  
中央教育審議会「高大接続特別部会」臨時委員  
文部科学省高等教育局高等教育企画課専門調査員  
山本 繁

全国の大学をご支援しています。いつでもお気軽にご連絡下さい  
(支援メニューや費用はホームページに掲載しています)  
ホームページ <http://www.stopheneet.jp/>  
メール [s.yamamoto@newvery.jp](mailto:s.yamamoto@newvery.jp)

## 地域の支援事業チャート



このチャートは平成 23・24 年度栃木県「新たな公の担い手支援事業」を活用して作成されたものです

栃木県内のおもな若者支援団体

| 団体名                 | 内容   | おもな対象                              | 所在地  | 料金                                 | 連絡先  |
|---------------------|--|------------------------------------|--|------------------------------------|--|
| ■とちぎ若者サポートステーション    | <b>(厚生労働省委託事業)</b><br>1) サポステ相談支援事業<br>○職業的自立に向けた専門的相談<br>○各種就職支援プログラムの実施<br>○各種セミナーを通じた啓発と、他の若者支援機関への誘導<br>2) サポステ・学校連携推進事業<br>○アウトリーチ等の訪問支援<br>○学校等との中退者情報の共有による中退者支援の強化<br>○学び直し支援の実施<br><b>(任意実施)</b><br>3) 若年無業者等集中訓練プログラム事業<br>○合宿形式を含む生活面のサポートと職業実習の訓練を集中的に実施 | 原則として、義務教育終了後15歳から概ね40歳未満の若者とそのご家族 | 宇都宮市駅前通り<br>1-5-13<br>サエラビル3階                  | 無料<br>イベントプログラムの内容によっては、実費相当額の負担あり | 電話：028-612-2341<br>FAX：028-612-2343<br>■E-Mail：<br>info@tochigi-saposute.net<br>■URL：<br>http://tochigi-saposute.net/    |
| ■とちぎ県南若者サポートステーション  |  |                                    | 小山市中央町3-7-1<br>6F<br>小山市生涯学習センター内              |                                    | ■TEL：0285-25-7002<br>FAX：0285-25-7068<br>■E-Mail：<br>info@kennan-saposute.net<br>■URL：<br>http://www.kennan-saposute.net |
| ■とちぎ県北若者サポートステーション  |  |                                    | 栃木県那須塩原市一区町105-89                              |                                    | ■TEL：0287-47-5200<br>FAX：0287-47-5252<br>■E-Mail：<br>c-coach@space.ocn.ne.jp   |
| ■NPO 法人 KHJ とちぎベリー会 |  |                                    | 不登校・引きこもり家族及び当事者<br>当事者（家族）<br>不登校・引きこもり当事者・家族 |                                    | 宇都宮市元今泉<br>5-9-7 まちぴあ2F<br>電話相談 アミクス<br>050-3671-3075  |



| 団体名                       | 内容  | おもな対象                                 | 所在地   | 料金  | 連絡先   |
|---------------------------|---|---------------------------------------|---|---|---|
| ■NPO 法人 CCV               | 学習指導、SST、居場所作り。<br>就労継続B型、就労移行支援。<br>自立訓練（生活訓練）、生活介護、<br>日中一時支援。                | 不登校、引きこもり<br>知的障害、精神障害、発<br>達障害の方     | 鹿沼市貝島町 427-2<br>（CCV 学園）<br>鹿沼市茂呂 1997-2<br>（CCV ウェルフェア）<br>鹿沼市千手町<br>2609-1（CCV タック） | ※プログラムによって<br>異なる   | ■TEL：0289-63-0666<br>（担当：福田）<br>■URL：<br><a href="http://www.ccv9.com/">http://www.ccv9.com/</a>  |
| ■一般社団法人とちぎ青<br>少年自立援助センター | 社会参加に困難を持つ若者のため<br>の、合宿型支援（生活訓練～就労<br>支援）、保護者相談、家庭訪問支援                          | 概ね 15 歳から 39 歳まで<br>の若者とその保護者         | 真岡市高勢町 2-<br>209  | 有料<br>一ヶ月約 15 万円の寮<br>費   | ■TEL：0285-81-5816<br>FAX：0285-81-5816<br>■E-Mail：<br><a href="mailto:info@tochigi-ysc.org">info@tochigi-ysc.org</a><br>■URL：<br><a href="http://www.tochigi-ysc.org">http://www.tochigi-ysc.org</a>   |
| ■とちぎユースワークカ<br>レッジ        | 若年無業者を対象に、6 ヶ月を 1<br>クールとして支援。集団活動を通<br>して社会性を回復し、就業や進学<br>など再び社会参画するための支<br>援。 | 15 歳から概ね 35 歳まで<br>の就学・就労をしていな<br>い若者 | 宇都宮市宮園町 8-2<br>松島ビル 2F  | 入学期 4 月、10 月<br>入学印 50,000 円<br>授業料 40,000 円/月<br>諸経費 5,000 円/月 | ■TEL/FAX：028-638-5502<br>■E-Mail：<br><a href="mailto:info@youthworkcollege.jp">info@youthworkcollege.jp</a><br>■URL：<br><a href="http://www.youthworkcollege.jp/">http://www.youthworkcollege.jp/</a> |
| ■NPO 法人国際自然大学<br>校        | 短期合宿を中心に様々な体験活動<br>を通して、自分自身と向き合い、<br>他者との関わりを学ぶ。                               | 18 歳から 30 歳前後の若<br>者                  | 日光市所野 1547  | 1 泊 5000 円前後  | ■TEL：0288-50-1175<br>■E-Mail：<br><a href="mailto:nikko@nots.gr.jp">nikko@nots.gr.jp</a>   |
| ■NPO 法人キャリアコー<br>チ        | 人材育成及び能力開発、就職支援<br>のための教育、研修に関する事業<br>や青少年育成事業                                  | 求職者及び青少年                              | 那須塩原市一区町<br>105-89  | 無料<br>（一部有料）  | ■TEL：0287-47-5200<br>FAX：0287-47-5252<br>■E-Mail：<br><a href="mailto:c-coach@space.ocn.ne.jp">c-coach@space.ocn.ne.jp</a>   |

| 団体名                     | 内容  | おもな対象   | 所在地   | 料金  | 連絡先  |
|-------------------------|---|---|---|---|--|
| ■一般社団法人栃木県若<br>年者支援機構   | 主に、中間的就労やしごとれでし<br>ごとの体験や訓練ができます。ま<br>た平成 24 年度から発達障害の学<br>習支援「ANDANTE」を開校しまし<br>た。 | (しごとや)概ね 15 歳か<br>ら 39 歳の方<br><br>(ANDANTE)<br>10 歳以上 | (しごとや)<br>宇都宮市昭和 2-7-5<br><br>(ANDANTE)<br>宇都宮市宮園町 8-2<br>松島ビル 2F | (しごとや)登録料<br>7,000 円(半年)<br><br>(ANDANTE)<br>入塾金 15,000 円<br>月謝 21,000 円<br>教材費月額 1,050 円 | ■TEL/FAX : 028-678-4745  |
| ■NPO 法人トチギ環境未<br>来基地    | 若者のグループによる環境保全活<br>動の企画、運営。<br>里山の整備や森づくりの実践を通<br>じて、若者を育む。                         | プログラムに応じて、<br>様々な若者と活動。                               | 芳賀郡益子町大沢<br>2584-1  | 無料 ~<br>5,000 円程度   | ■TEL : 0285-81-5373<br>■E-Mail :<br>tochigi@conservation-corps.jp  |
| ■とちぎユースサポー<br>ターズネットワーク | 実践型インターンシップ事業、<br>若者の社会をよくするプロジェク<br>トの孵化・支援  | 社会貢献活動、自己成長<br>意欲のある若者                                | 宇都宮市宮園町 8-2<br>松島ビル 2F  | 無料  | ■TEL/FAX : 028-612-3341<br>■E-mail :<br>ysn_office@tochigi-ysn.net<br>■URL :<br>http://www.tochigi-ysn.net |
| ■(株)ティビィシィスキャ<br>ット     | 就労支援 (スキルアップや就職活<br>動のための講座、キャリアカウ<br>セリング等)  | 学生・新卒・若年者   | 宇都宮市江野町<br>6-15<br>大立ビル 2 階<br>(株)ティビィシィ・ス<br>キャット                | 無料  | ■TEL : 028-651-5633<br>(担当:野崎)   |

| 団体名                    | 内容  | おもな対象                        | 所在地  | 料金        | 連絡先   |
|------------------------|---|------------------------------|--|-----------|---|
| <p>■とちぎジョブモール(栃木県)</p> | <p>就職を支援するため、就職に関する悩み相談をはじめ総合的な相談からキャリアカウンセリング、職場定着までをワンストップで支援します。</p> <p>また、各種業界や就職支援のセミナーをはじめ就職活動のスキルアップのための事業を行っています。</p> <p>さらに、国のハローワークと連携しており全国の求人情報が検索できます。</p> | <p>若年者、中高年、障害者で就職を希望される方</p> | <p>宇都宮市駅前通り<br/>1-3-1<br/>フミックステムビル 1F</p> | <p>無料</p> | <p>■TEL:028-623-3226<br/>■FAX:028-623-3236<br/>○利用時間<br/>月曜日～金曜日<br/>午前 8:30～午後 7:00<br/>土曜日<br/>午前 10:00～午後 5:00</p> |

## 中途退学者の課題・検討委員会 審議過程

---

平成 23 年度

◇第 1 回 全体会

日 時：平成 24 年 3 月 15 日(木)10:00～12:00 会場：ぽ・ぽ・ら研修室

内 容：事業説明、顔合わせ、意見交換 他

参加者：16 名

平成 24 年度

◇第 2 回 全体会

日 時：平成 24 年 5 月 15 日(火) 10:00～12:00 会場：栃木県庁昭和館

内 容：参加団体の紹介、プラットフォームの進め方について意見交換、中途退学者の実態把握 他

参加者：19 名

◇第 3 回 全体会

日 時：平成 24 年 7 月 11 日(水)10:00～12:00 会場：栃木県庁昭和館

内 容：アンケートの調査実施について、部会について 他

参加者：17 名

○第 1 回 調査部会

日 時：平成 24 年 7 月 26 日(金)10:00～11:50 会場：とちぎユースワークカレッジ教室

内 容：アンケートの調査票について 他

参加者：6 名

○第 1 回 支援部会

日 時：平成 24 年 8 月 9 日(木)10:00～12:00 会場：とちぎユースワークカレッジ教室

内 容：学生の状況把握、支援策のアイデア 他

参加者：9 名

○第 2 回 調査部会

日 時：平成 24 年 8 月 9 日(木)15:00～17:00 会場：宇都宮市総合福祉センター

内 容：アンケートの調査実施について 他

参加者：8 名

○第 2 回 支援部会

日 時：平成 24 年 9 月 5 日(水)10:00～12:10 会場：栃木県庁本館

内 容：学生の状況把握、大学の状況の把握 他

参加者：7 名

◇第4回全体会

日 時：平成24年9月12日(水)10:00～12:00 会場：栃木県庁昭和館

内 容：各部の進捗状況報告、今後の運営について 他

参加者：17名

○第3回 支援部会

日 時：平成24年10月17日(水)10:00～12:10 会場：栃木県庁本館

内 容：親との関係について、大学入学時の状況、支援策のアイデア 他

参加者：8名

○第4回 支援部会

日 時：平成24年11月21日(水)10:00～12:10 会場：栃木県庁本館

内 容：サポートステーションと大学の連携について、支援団体の確認 他

参加者：8名

○第3回 調査部会

日 時：平成24年11月22日(木)10:00～12:00 会場：栃木県庁本館

内 容：アンケートの調査結果の考察、個別ヒアリングについて 他

参加者：6名

◇第5回全体会

日 時：平成24年11月28日(水)10:00～12:00 会場：栃木県庁昭和館

内 容：アンケートの実施報告、支援案報告、シンポジウムの講師及び日程について、今後の運営について 他

参加者：17名

○第1回 シンポジウム部会

日 時：平成24年12月6日(木)10:00～12:00 会場：ぽ・ぽ・ら

内 容：シンポジウム講師、進行、広報計画について 他

参加者：9名

○第5回 支援部会

日 時：平成24年12月18日(火)15:00～16:30 会場：宇都宮市東市民活動センター

内 容：支援案チャートの検討 シンポジウムの内容確認 他

参加者：5名

○第2回 シンポジウム部会

日 時：平成25年1月17日(木)10:00～12:00 会場：栃木県庁本館

内 容：シンポジウム行動計画、追加広報について 他

参加者：7名

○第6回 支援部会

日 時：平成25年1月25日(金)13:00～15:00 会場：栃木県庁本館

内 容：支援案チャートの検討 シンポジウムの内容確認 他

参加者：8名

◇第6回全体会

日 時：平成25年1月30日(水)10:00～12:00 会場：栃木県庁昭和館

内 容：シンポジウムの運営、報告書について 他

参加者：18名

◇第7回全体会

日 時：平成25年2月27日(水)10:00～12:00 会場：栃木県庁昭和館

内 容：シンポジウムの報告、報告書について 他

参加者：15名

○第7回 支援部会

日 時：平成25年3月13日(水)10:00～12:00 会場：ぽ・ぽ・ら研修室

内 容：支援案チャートの検討 他

参加者：8名



平成 25 年 3 月 31 日

監修：中途退学者の課題・支援検討委員会

制作・編集：NPO 法人とちぎユースポーターズネットワーク

問合せ：栃木県県民生活部県民文化課

栃木県宇都宮市塙田 1-1-20 TEL:028(623)3422

NPO 法人とちぎユースポーターズネットワーク

栃木県宇都宮市宮園町 8-2 松島ビル2F TEL:028(612)3341